箱　崎　67

― 箱崎遺跡 第105次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1484集

２０２３

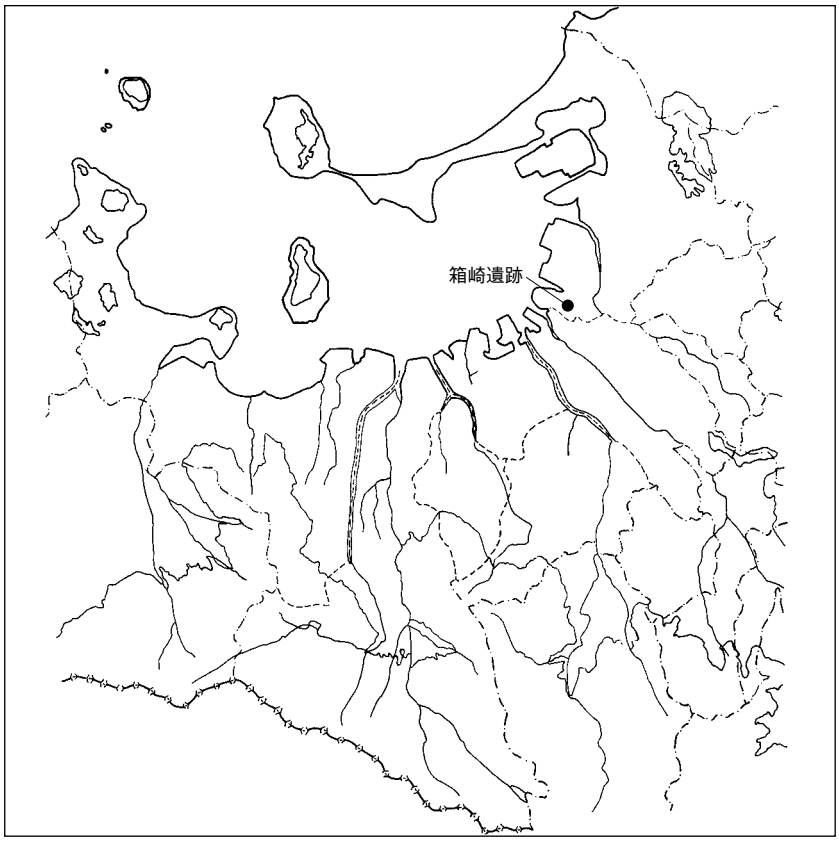
福 岡 市 教 育 委 員 会

HAKO ZAKI

箱　崎　67

― 箱崎遺跡（はこざきいせき） 第105次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1484集



遺跡略号　HKZ-105

調査番号　1951

２０２３

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産があり、それらを保護し、後世に伝えることは、現在に生きる私たちの責務であります。本市では、近年の著しい都市化の中でやむなく失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存を行うことで後世まで伝えるよう努めています。

本書は、共同住宅建設に伴って実施された箱崎遺跡 第105次調査の成果について報告するものです。今回の調査では、中世から近世にかけての井戸や廃棄土坑などの遺構が確認され、多種多様な輸入陶磁器・国産陶磁器類も出土し、先人達が営んできた生活の様子を知ることができました。これらは、地域の歴史を解明していく上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業主である株式会社ダイナインタラクティブ様をはじめ関係者の皆様には、発掘調査中から整理作業および本報告書の作成に至るまで、様々な面でご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和５年３月23日

福岡市教育委員会

教育長　石橋　正信

例　言

1．本書は、共同住宅建設に伴って、福岡市東区箱崎３丁目2416番１で福岡市教育委員会が実施した箱崎遺跡第105次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3．本書に掲載した遺構の実測図作成および写真撮影は、調査担当の吉田大輔が行った。
4．本書に掲載した遺物の実測図作成は、立石真二、林田憲三、久富美智子、野村美樹、吉田が行い、挿図の製図は久富、野村、吉田が行った。また、遺物の写真撮影は吉田が行った。
6．本書で用いた方位は磁北で、真北から７°20′西偏する。
7．調査で検出した遺構については、溝をＳＤ、井戸をＳＥ、土坑をＳＫ、柱穴・小穴をＳＰとし、遺構の種別に関わらず１から始まる通し番号を付した。
8．本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
9．本文中の陶磁器分類は以下の文献に拠る。
　九州近世陶磁学会編　2000『九州陶磁の編年』
　太宰府市教育委員会　2000「大宰府条坊跡ＸＶ-陶磁器分類編-」『太宰府の文化財』第49集
10．本書の執筆および編集は吉田が行った。

遺　跡　名	箱崎遺跡	調　査　次　数	第 105 次	調　査　略　号	HKZ-105
調 査 番 号	1951	分布地図図幅名	034 箱崎	遺跡登録番号	2639
申請地面積	274.91㎡	調 査 対 象 面 積	149.06㎡	調　査　面　積	135㎡
調 査 期 間	令和元（2019）年 11 月 25 日～令和元（2019）年 12 月 24 日			事前審査番号	2019-2-503
調　査　地	福岡市東区箱崎３丁目 2416 番１				

目　次

本文目次

Ⅰ．はじめに…… 1
　１．調査に至る経緯…… 1
　２．調査の組織…… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境…… 2
　１．地理的環境…… 2
　２．歴史的環境…… 2
　３．調査地周辺の発掘調査…… 2
Ⅲ．調査の記録…… 4
　１．調査の概要…… 4
　２．遺構と遺物…… 5
　　１）溝（SD）…… 5
　　２）井戸（SE）…… 6
　　３）土坑（SK）……16
　　４）その他の遺物……21
Ⅳ．総括 ……21

挿図目次

第１図　箱崎遺跡調査地点位置図(1/10,000) …… 3
第２図　第105次調査地点位置図(1/2,000･1/500) …… 3
第３図　遺構配置図(1/100) …… 4
第４図　SD7･SD17実測図(1/40) …… 5
第５図　SE4実測図(1/40)および出土遺物(1/3) …… 6
第６図　SE8実測図(1/40)および出土遺物(1/3) …… 7
第７図　SE12実測図(1/40)および出土遺物①(1/3) …… 8
第８図　SE12出土遺物②(1/3) …… 9
第９図　SK1実測図(1/40)および出土遺物(1/3､103は1/4) … 10
第10図　SK2実測図(1/40)および出土遺物①(104は1/3､1/4) 11
第11図　SK2出土遺物②(1/4) …… 12
第12図　SK6実測図(1/40)および出土遺物①(1/3) …… 13
第13図　SK6出土遺物②(1/4) …… 14
第14図　SK6出土遺物③(1/4) …… 15
第15図　SK6出土遺物④(1/4) …… 17
第16図　SK6出土遺物⑤(1/4) …… 18
第17図　SK6出土遺物⑥(1/4､147は1/5) …… 19
第18図　その他の出土遺物(1/3､174～180は1/4) …… 20

写真図版目次

写真図版１
　1　調査地全景　南西から
　2　Ⅰ区全景　南西から
　3　Ⅱ区全景　南西から
　4　Ⅱ区全景　北から
　5　Ⅲ区全景　南西から
　6　Ⅲ区全景　北から
写真図版２
　7　Ⅰ区西壁土層　南東から
　8　Ⅱ区東壁土層　北西から
　9　Ⅱ区東壁土層　南西から
　10　Ⅲ区東壁土層　北西から
　11　SD7(Ⅰ区側)　西から
　12　SD7(Ⅱ区側)　南東から
　13　SD16　西から
　14　SE8(Ⅱ区側)　北西から
　15　SE12　南東から
　16　SK1　北西から
写真図版３
　遺物写真①
写真図版４
　遺物写真②

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

令和元（2019）年８月２日付で、福岡市東区箱崎３丁目2416番１（敷地面積：274.91㎡）における共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課宛てになされた（事前審査番号：2019-２-503）。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれること、また照会地の南側道路部分では過去に発掘調査が実施されており、照会地にも遺跡が遺存する可能性が高いと考えられた。さらに今回の照会を受けて令和元（2019）年９月10日に実施された確認調査でも、地表面下65㎝以下で井戸や土坑等の遺構が確認された。

これらを受け、遺跡の保全等について申請者と協議を行った結果、今回の工事による埋蔵文化財への影響が回避できないとして、敷地のうち埋蔵文化財が影響を受けると判断される149.06㎡を対象として記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、令和元（2019）年11月15日付で事業主体者である株式会社ダイナインタラクティブを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、令和元（2019）年11月25日より発掘調査を、令和２年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。なお、変更契約を行い、令和４年度まで資料整理・報告書作成業務を実施した。

２．調査の組織

調査委託　株式会社 ダイナインタラクティブ

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元年度　整理報告：令和２～４年度）

調査総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	課 長	菅波 正人	（元～４年度）
		同課調査第２係長	大塚 紀宜	（元年度）
			藏冨士 寛	（２・３年度）
			井上 繭子	（４年度）
		調査第１係長	吉武 学	（元・２年度）
			本田 浩二郎	（３・４年度）
庶　務	同文化財活用課	管理調整係	松原 加奈枝	（元・２年度）
			井手 瑞江	（３年度）
			内藤 愛	（３・４年度）
事前審査	同埋蔵文化財課	事前審査係長	本田 浩二郎	（元・２年度）
			田上 勇一郎	（３・４年度）
		同課事前審査係主任文化財主事	田上 勇一郎	（元・２年度）
			森本 幹彦	（３・４年度）
		事前審査係文化財主事	朝岡 俊也	（元年度）
			山本 晃平	（２・３年度）
			三浦 悠葵	（４年度）
調査・整理担当	同埋蔵文化財課	文化財主事	吉田 大輔	

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．地理的環境

箱崎遺跡は、博多湾と多々良川河口の多々良潟の間にある南北約2.2km、東西約0.6kmの細長い砂州上に立地する。この砂州は「箱崎砂層」と呼ばれる新砂丘層で形成され、海浜砂と風成砂部分からなる。砂層の形成開始期は、縄文海進極盛期の高海面期後の相対的な小海退期とみられる（下山1998)。これまでに実施された発掘調査で検出された砂丘の標高から旧地形を復元すると、遺跡の中央付近を頂点として、東西に緩やかに下る南北方向の尾根線があることがわかる。この尾根線が現在の街区にほぼ沿うように筥崎宮付近まで延びており、この南側には浅い谷状の鞍部を挟んで標高2.5～3.5mの安定した高所がある（中尾2018a･b)。

２．歴史的環境

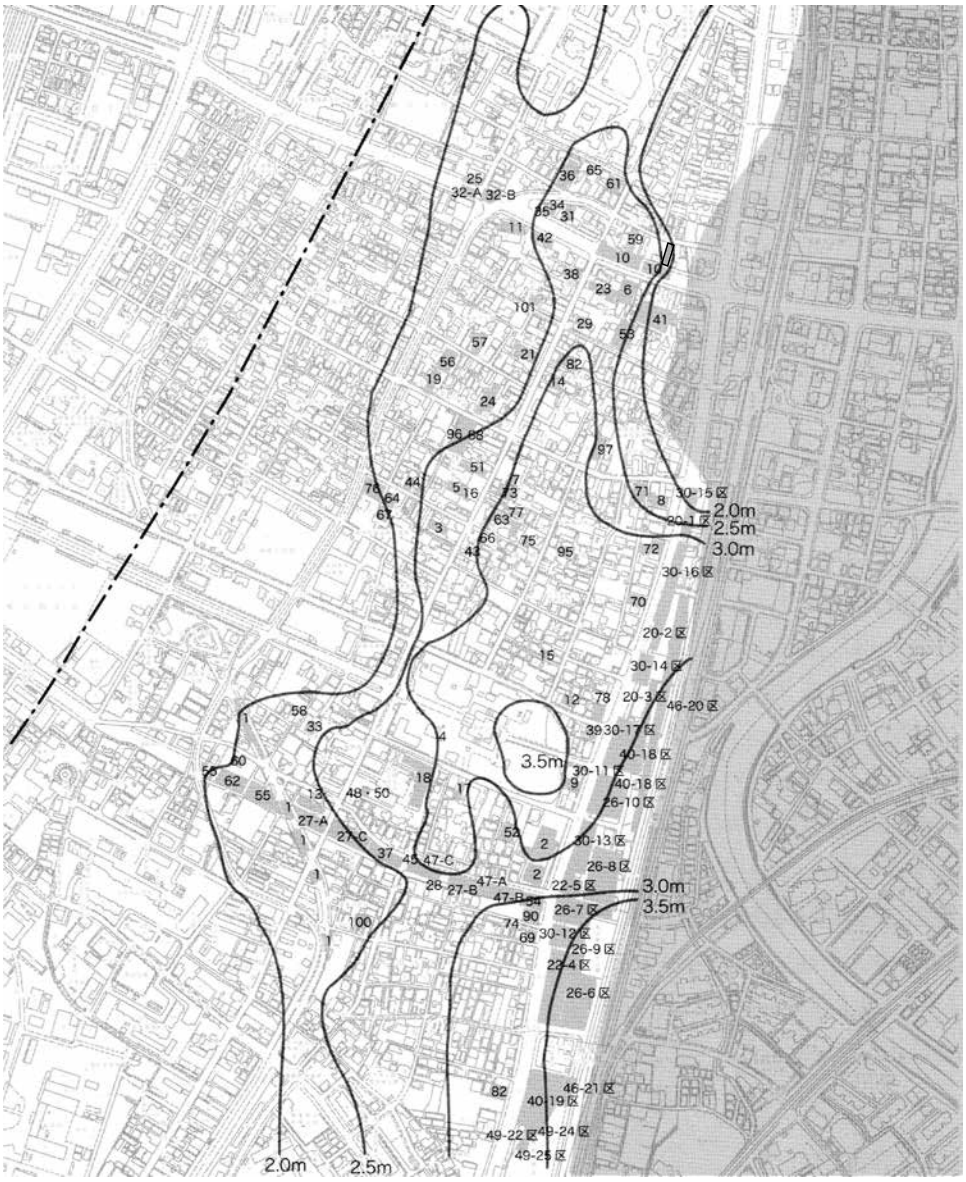
これまでの諸研究によって遺跡全体の検討がなされており（久住編2019・佐藤2013・中尾2018ａ・ｂ)、これらをもとに概略を述べたい。

弥生時代から古墳時代にかけては、部分的に集落・墓が営まれているが小規模で散発的なものである。集落が本格的にな展開していくのは、筥崎宮の創建が契機となる。『筥崎宮縁起』によれば筥崎宮は921年頃の創建で、飯塚市大分八幡宮から遷座し、大宰少弐藤原真材が造立にあったことがわかる（重松2018：p26)。遷座の理由については新羅入寇への危機感と大宰府官人の日中貿易への私的関心によるところが大きいといわれる。理由の前者については、大陸に対して最先端に位置する博多湾沿岸に鴻臚館、博多、香椎宮とならび防衛と貿易の拠点を配置したのであろう。後者については、筥崎宮大宮司を大宰府官の秦氏が兼ねていることから、大宰府と筥崎宮に密接な結びつきあったことが大きく関連しているのだろう。創建前後の10～11世紀前半頃は、遺跡南東部に集落が広がり、越州窯系青磁やイスラム陶器、緑釉陶器、石帯巡方等が出土することから、官衙的施設や官人居住区の可能性が考えられ、また大宰府や鴻臚館との関わりを示す瓦類が出土している。11世紀後半～12世紀前半には、井戸や土坑の数が増加し、貿易陶磁器・墨書陶磁器が多く出土する。とくに墨書陶磁器は遺跡の北西部に集中しており、「宮寺縁事抄」の記録にあるような宋人の居住が想定される。12世紀～13世紀前半には、遺跡全体に集落が展開し、鉄やガラスを集落内で生産した痕跡もみられる。元寇前後～室町時代にあたる13世紀後半～16世紀には、引き続き遺跡全域で生活痕跡が確認できるが、15世紀以降は遺構が少なくなっている。

３．本調査地周辺の調査

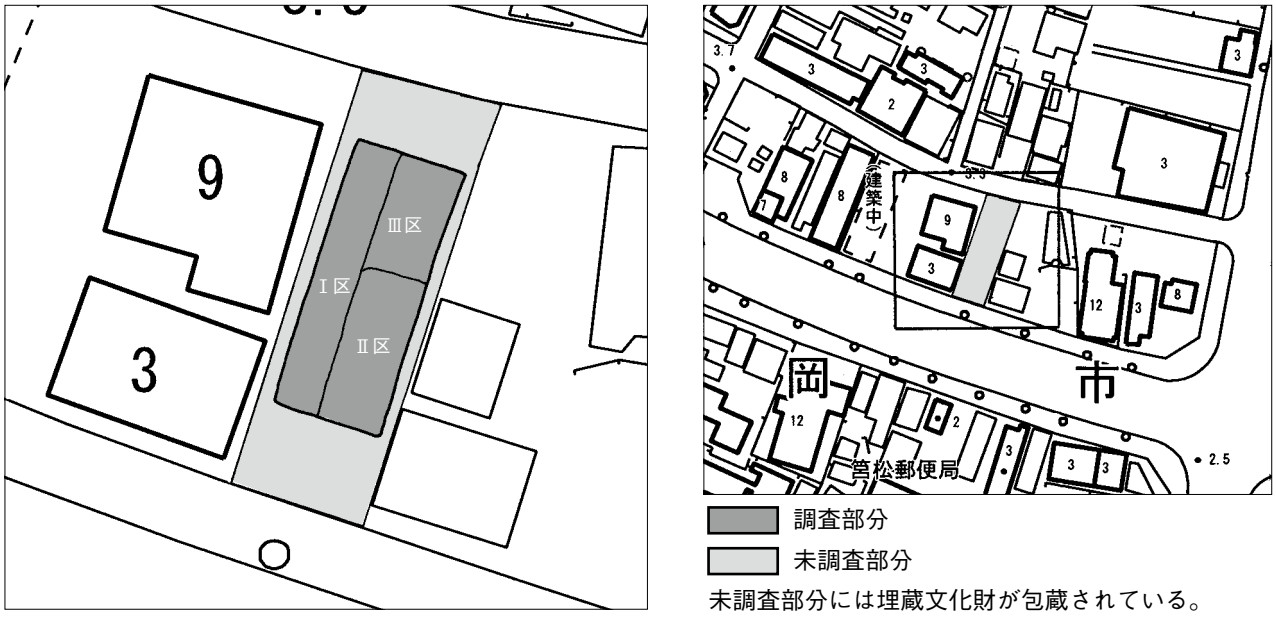
10次調査（市報551集）　105次調査区の南～西側に位置する。４世紀～５世紀初頭の土師器甕が出土したが、本格的な生活痕跡は12世紀以降である。12世紀の遺構は少ないが、砂丘際で人骨・馬骨が出土した。12世紀後半から遺構が増加し、井戸や土坑が検出される。鋳型や取瓶など鋳造関連遺物が調査区の西側で出土しており、とくに鍋の鋳型が多い。鋳造遺構そのものは検出されていないが、調査区の西に鋳造関連遺構の存在が想定される。13世紀から遺構が少なくなり、14世紀には無くなる。15・16世紀には現在の町割と同方向の区画溝が検出されている。

59次調査（市報1048集）　105次調査区の西側に位置する。中世～近世の遺構が検出されている。６世紀末頃の遺物もわずかに出土しているが遺構は検出されていない。12～13世紀の遺構が多く、墓３基がある。近世にかかる時期の溝もあり、これは現在の町割方向にほぼ沿っている。



中尾裕太氏作成の図に加筆・改変。調査区の位置・範囲は厳密ではない。

第１図　箱崎遺跡調査地点位置図（1/10,000）



未調査部分には埋蔵文化財が包蔵されている。

第２図　第105次調査地点位置図（1/2,000・1/500）

Ⅲ．調査の記録

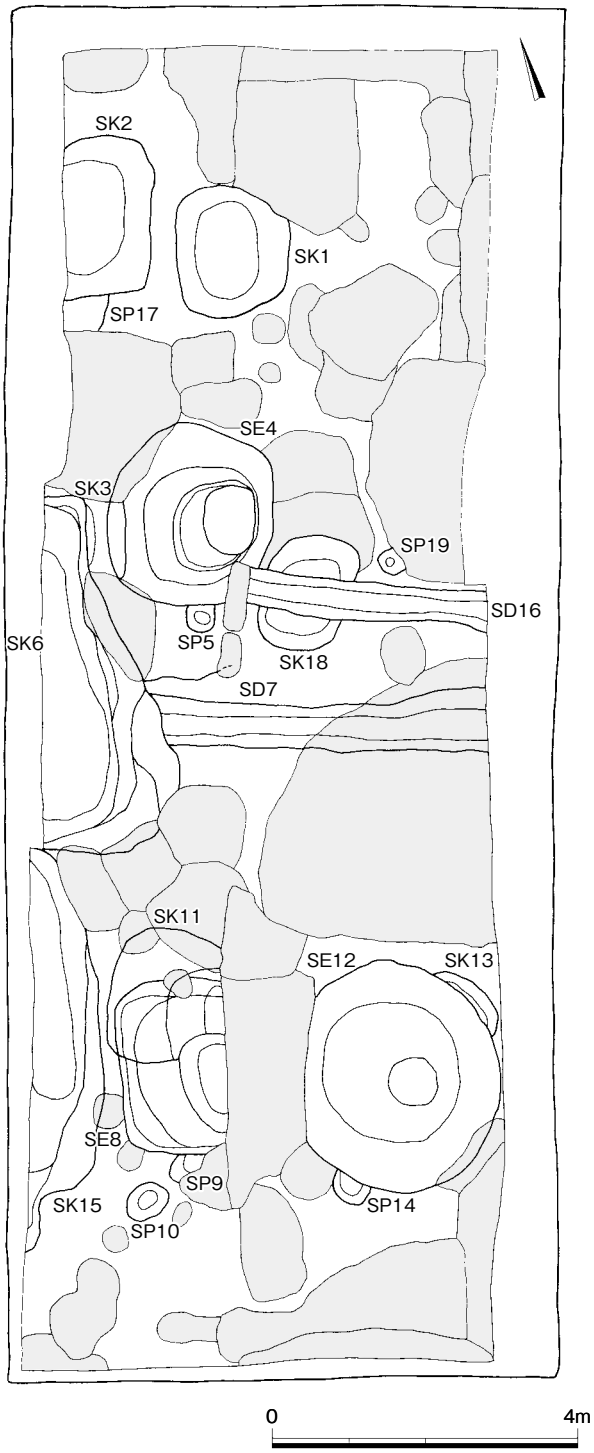
１．調査の概要

１）調査の経過（第１・２図）

箱崎遺跡第105次調査区は、東区箱崎３丁目2416番地１に所在する(第1図)。調査前は戸建て住宅が解体された後更地となっていた。地表面の標高は約3.4mである。調査の対象は「Ⅰ－１調査に至る経緯」に記したとおり、事業対象面積274.91㎡のうち、今回の共同住宅建設工事の影響を避けられない149.06㎡としたが、周辺の安全対策や作業上の安全を確保したため、実際の調査面積は135㎡となった。

発掘調査は、令和元（2019）年11月25日に開始した。表土鋤取り時および調査中の排土は調査区内で処理する必要があったため、調査範囲を３区画に分け、まず調査範囲西側１/２程度（Ⅰ区）を先行して調査し、残る東側の南半(Ⅱ区)、北半（Ⅲ区）の順に調査を実施した（第２図)。

11月25日にⅠ区の表土鋤取りを重機により行い、その後機材等の搬入や環境整備を行った。地表下約0.6mまで掘り下げた標高2.8m前後で確認できた黄褐色～黄白色砂の砂丘面上で遺構・遺物を検出したため、重機による掘削を止め、人力による調査に切り替えた。遺構検出や掘削・精査を行い、適宜、デジタルカメラおよび35㎜カメラを使用して写真を撮影し、また１/10・１/20の実測図を作成して記録した。12月３日にはⅠ区の全景写真撮影、記録等作成後、12月６日にⅡ区の表土鋤き取りを実施した。Ⅰ区と同様に調査を進め、12月13日に全景写真撮影、記録等作成後、16日にⅢ区の表土鋤き取りを行った。12月18日にⅢ区の全景写真撮影、その後、記録類の作成や残務処理等を行った後、12月24日には調査区を埋め戻し、機材等を撤収して、第105次調査の工程をすべて完了した。なお、調査ではコンテナケース11箱分の遺物が出土している。



第３図　遺構配置図（1/200）

２）調査の概要と基本層序（第３図、写真１～７）

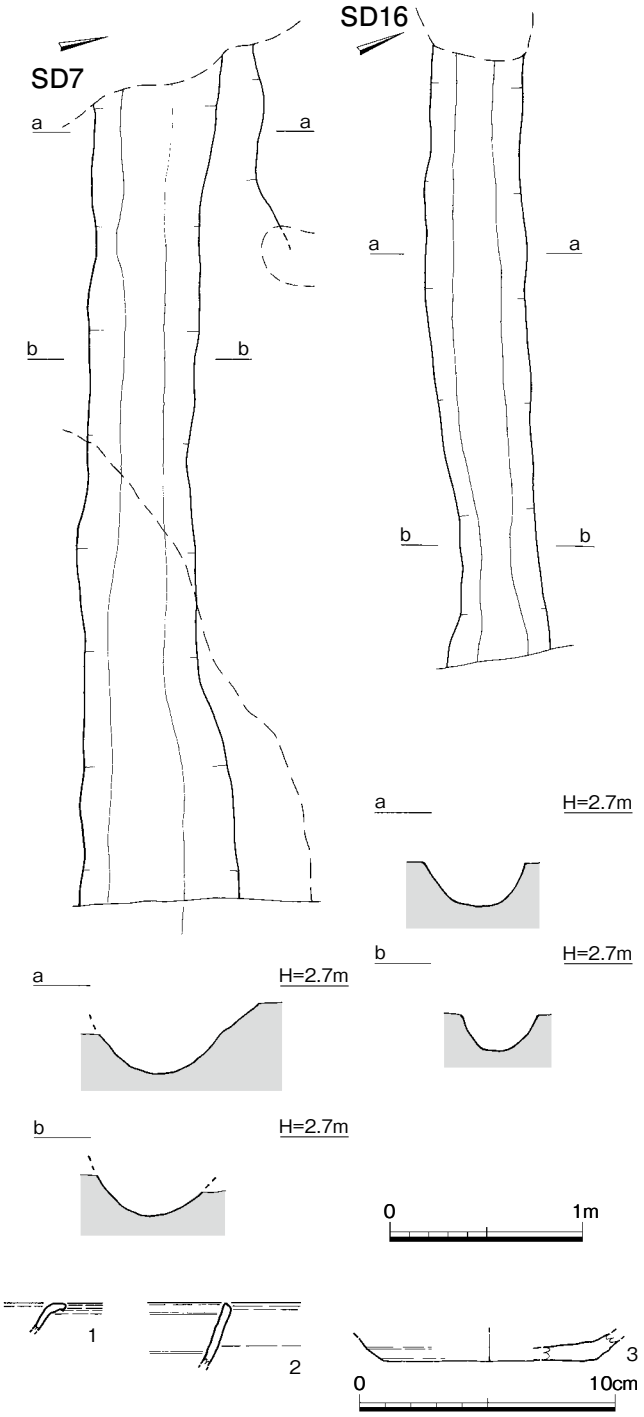
本調査地では、上述のように、標高約3.4mの現地表面から約0.6m掘り下げた、標高2.8m前後の黄褐色～黄白色粗砂上で遺構・遺物を検出し、この上面を遺構検出面として調査を実施した。表土鋤き取り時にはこの遺構検出面とした砂丘面の上層に堆積する褐色～暗褐色砂質土の遺物包含層が一部で確認できた。厚さは15～20cm程度である。ただし、調査地は近世から近現代

にかけて建物等の解体に伴う整地・盛土やゴミ穴等により、大きく削平・攪乱を受けている。このため、この遺物包含層は大部分が削平されている状況であり、この遺物包含層上面での遺構検出は行っていない。調査で確認した遺構の中には、明らかにこの遺物包含層に切り込んでいるものもあるため、遺物包含層の時期は中世～近世に遡ると考えてよいだろう。

検出した遺構は、井戸３基、土坑５基、廃棄土坑３基、溝２条、小穴６基である。主な出土遺物は、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系白磁碗・青磁碗、中国陶器壺・甕・捏鉢等の輸入陶磁器類、土師器坏・皿、土鍋、瓦器椀、常滑焼の大甕、東播系須恵器の捏鉢、滑石製品等である。遺物は多くが井戸から出土し、小片が多い。３基の廃棄土坑には、15～16世紀頃の瓦が多量に廃棄されており、軒平・軒丸瓦や丸瓦・平瓦・鬼瓦等が出土した。以下、検出した遺構・遺物について詳細に述べていく。

２．遺構と遺物

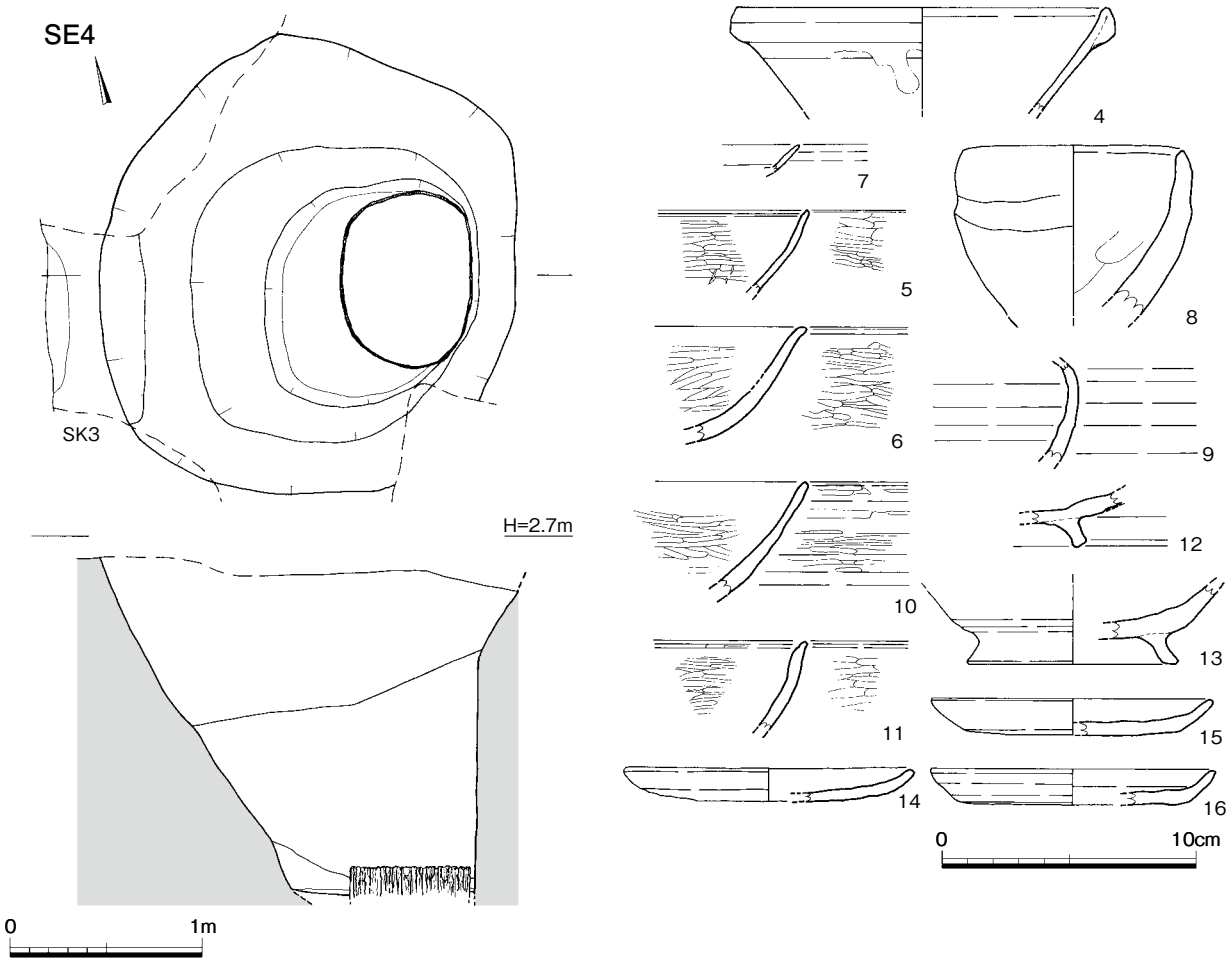
上述したように、調査はⅠ～Ⅲ区に分けて実施したが、それによって掘り残した部分はなく、区にまたがって検出された遺構もあるため、区ごとには報告せず、検出した遺構ごとに報告を行う。検出した遺構には、1から始まる遺構番号を付しており、欠番はあるが重複はない。以下の報告にあたっても、原則として調査時の遺構番号を用い、この番号と遺構の種別を示す略号とを組み合わせて表記する。



第４図　SD7・SD16実測図（1/40）

１）溝（ＳＤ）

ＳＤ７（第４図）　調査区の中央付近で検出し、北西側中央付近に位置し、東西に延びる。主軸方位は、N-10°-Eにとり、ＳＤ16とほぼ並行している。長さ4.83m分を検出したが、東側は調査区外に延び、西側はＳＫ６によって壊されており、さらに東西に長かったものと考えられる。幅0.55～1.0m程、深さ0.25～0.4mを測る。埋土は暗褐色砂質土である。西側では東側に比べて0.5mほど幅が広がっていることがわかり、中央から東側の大部分は後世の攪乱により削平されたものと考えられる。ＳＫ６と重複し、これよりも古い。出土遺物は少なく、小片のため図示していないが、白磁や青磁片、土師器皿片などが出土した。15～16世紀の遺構と考えられる。



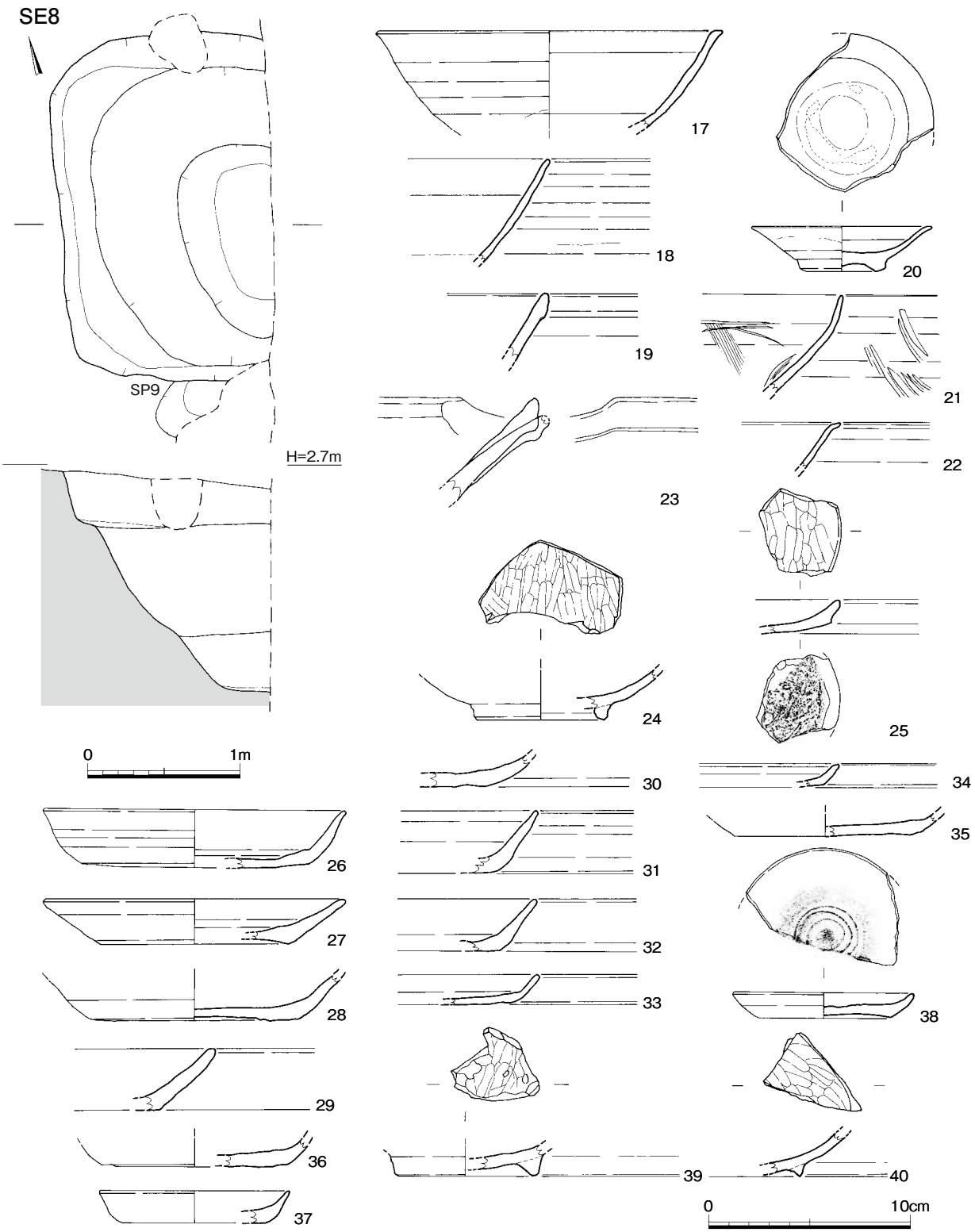
第５図　SE4実測図（1/40）および出土遺物（1/3）

ＳＤ17（第４図）　調査区の中央付近に位置する。長さ2.5m程を検出し、幅0.6～0.8m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は暗褐色砂質土である。主軸はN-15°-Eにとり、ＳＤ７とほぼ並行する。東側は調査区外に延びており、また西側は後世の攪乱により壊され、ＳＥ４と重複する部分が一部確認できたが、その延長を検出することができなかった。検出時のミスとも考えられるため、さらに西側に延びていた可能性が高いと考える。ＳＥ４・ＳＫ18と重複し、いずれよりも新しい。出土遺物は少なく小片が多い。白磁・青磁片、土師器皿などが出土した。

出土遺物（第４図）　１は白磁皿Ⅳ類の口縁部か。口縁部小片で断定はできないが、口縁は屈曲し、端部は外方に尖る。２は白磁碗の口縁部、口縁端部は丸みを帯びる。内面口縁部下に白堆線をもち、体部には沈線が巡る。３は土師器皿の底部で、板状圧痕が残る。出土遺物は12～14世紀のものであるが、ほかの出土遺物の時期からも、本遺構は15世紀頃の遺構と推測される。

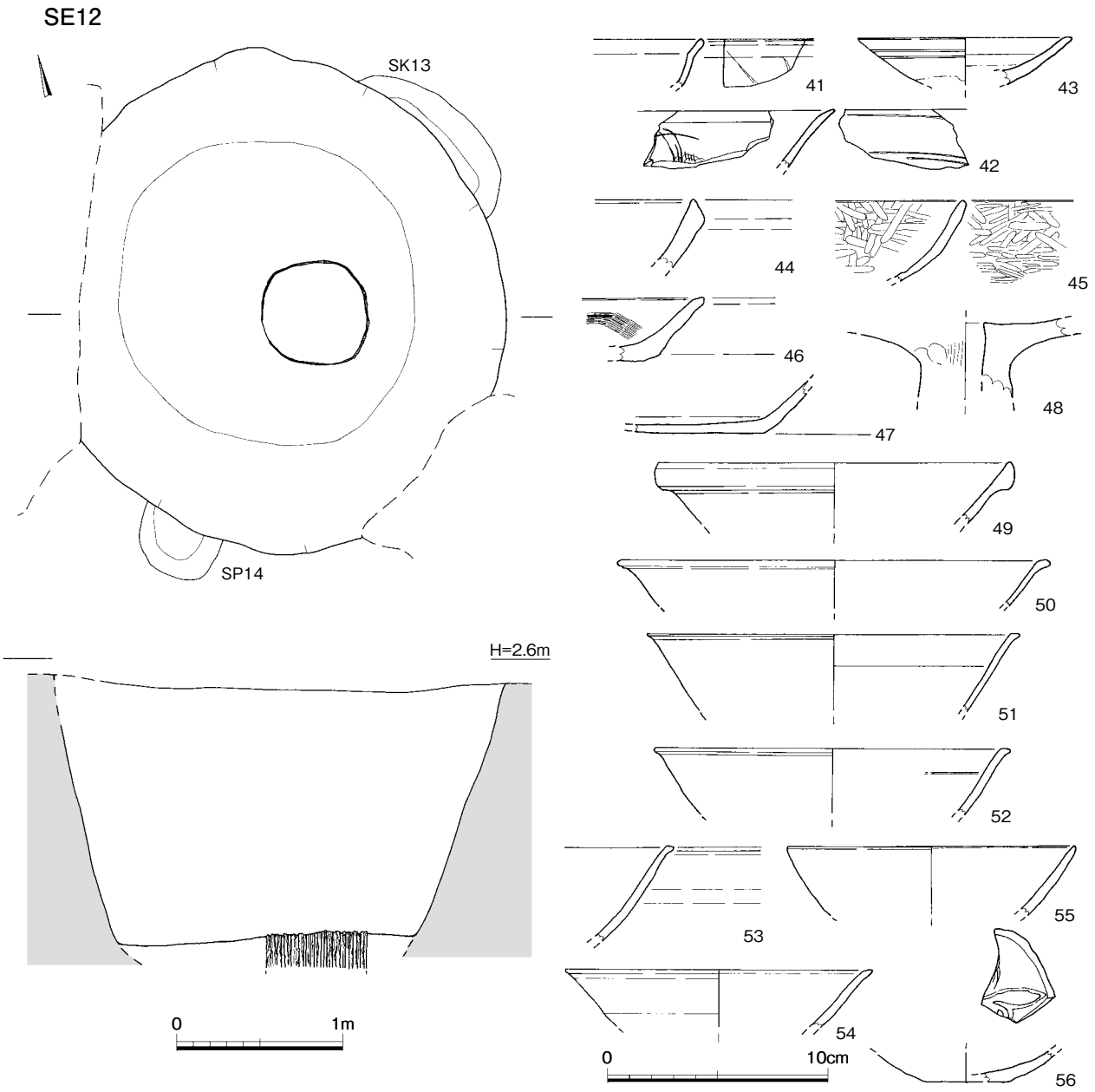
２）井戸（ＳＥ）

ＳＥ４（第５図）　調査区の中央やや北西寄りに位置する。掘り方の平面形はややいびつな楕円形で、現状で長軸2.2m、短軸2.0mを測る。検出面からの深さ約1.6m、標高0.9m付近で木製の井筒を検出した。木桶とみられるが、木質は劣化し脆弱であった。井筒は東側に偏った位置で検出され、平面形は楕円形を呈する。長軸0.9m、短軸0.7mを測る。埋土は暗灰褐色～暗褐色砂質土である。ＳＫ３・ＳＤ17と重複し、ＳＫ３より新しく、ＳＤ16より古い。



第６図　SE8実測図（1/40）および出土遺物（1/3）

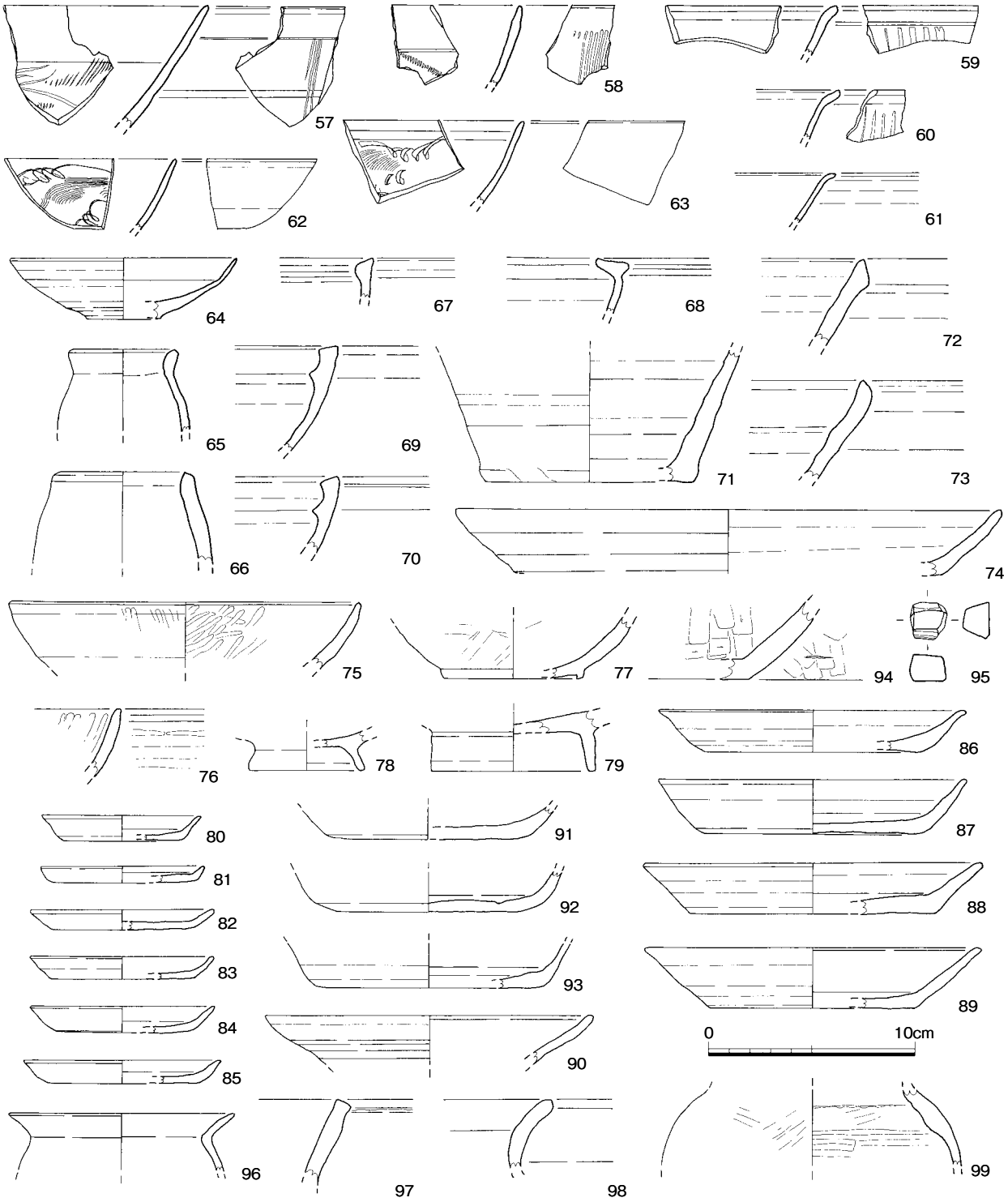
出土遺物（第５図）　４～６は井筒内から出土した。４は白磁碗Ⅳ類で、肉厚な玉縁状の口縁部をもつ。５は楠葉型瓦器椀で、胴部上半でやや内傾し、口縁部内面には一条の沈線が巡る。内外面とも黒色処理され、全体に横位の丁寧なミガキが施される。６は高台付瓦器椀で、高台は欠失しているが、底部に剥離した痕跡がある。口縁端部がやや外反し、外面に黒色処理が施され、内外面とも丁寧にミガキ調整される。７～16は掘り方から出土した。７は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類の口縁部～胴部片である。８は土



第７図　SE12実測図（1/40）および出土遺物①（1/3）

師器で、蛸壺か。外面口縁部下は強くナデられ条痕状となっている。９はやや小型の須恵器壷胴部である。内外面は暗灰色、胎土は赤褐色を呈する。10は土師器椀で、外面胴部下部には水挽き痕が明瞭に残り、内面はミガキ、外面はロクロナデ調整され、部分的にミガキが残る。11は楠葉型瓦器椀で、内面口縁下部に一条のやや浅い沈線が巡る。内外面とも横位・斜位の丁寧なミガキが施される。12は黒色土器Ａの高台付椀で、ハの字に開く高台が貼付される。全体にナデ調整される。13は土師器高台付椀で、全体に丁寧なナデが施される。14～16は土師器皿で、14は二次的な被熱により全体に赤色化している。15・16は底部糸切りで、15には板状圧痕が残る。出土遺物には一部に、８～９世紀代の遺物もみられるが、12世紀後半～13世紀前半の遺物が多くみられる。遺構もこの時期に属するものとみられる。

ＳＥ８（第６図）　調査区の南西側に位置する。後世の攪乱により、東側が失われており、明確ではないが、平面形は隅丸長方形に近い長楕円形とみられる。井筒は検出できなかったが形状から井戸と

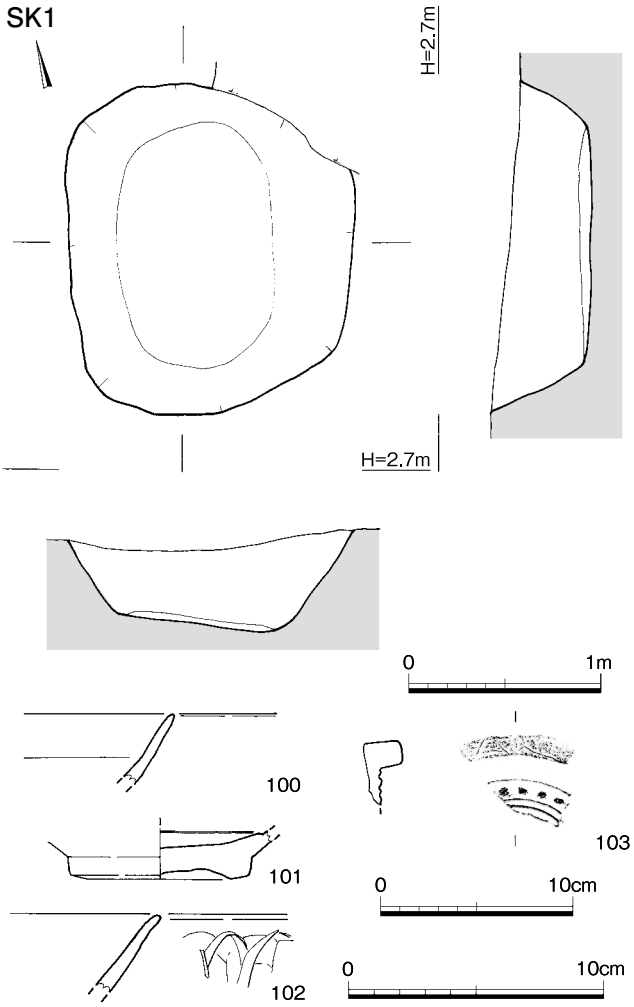


第８図　SE12出土遺物②（1/3）

判断した。掘り方は長軸2.3m、短軸は1.4m程度分を検出した。２段に掘り込みがあり、１段目は明確な平坦面をもつ。埋土は暗灰褐・黒灰色砂質土を主体として、暗黄褐色砂質土が混じる。炭化物や焼土が出土した。ＳＰ９、ＳＫ11と重複し、いずれよりも新しい。

出土遺物（第６図）　17～35は掘り方上層から出土した。17～19は白磁碗である。17は白磁碗Ｖ-４ａ類で、口縁上端部は水平にし、やや外に張り出す。胴部内面下位に一条の沈線が巡る。胴部外面下位以下は露胎である。18の胴部はやや内湾しながら立ち上がり、内面に沈線が一条巡る。外面胴部下半

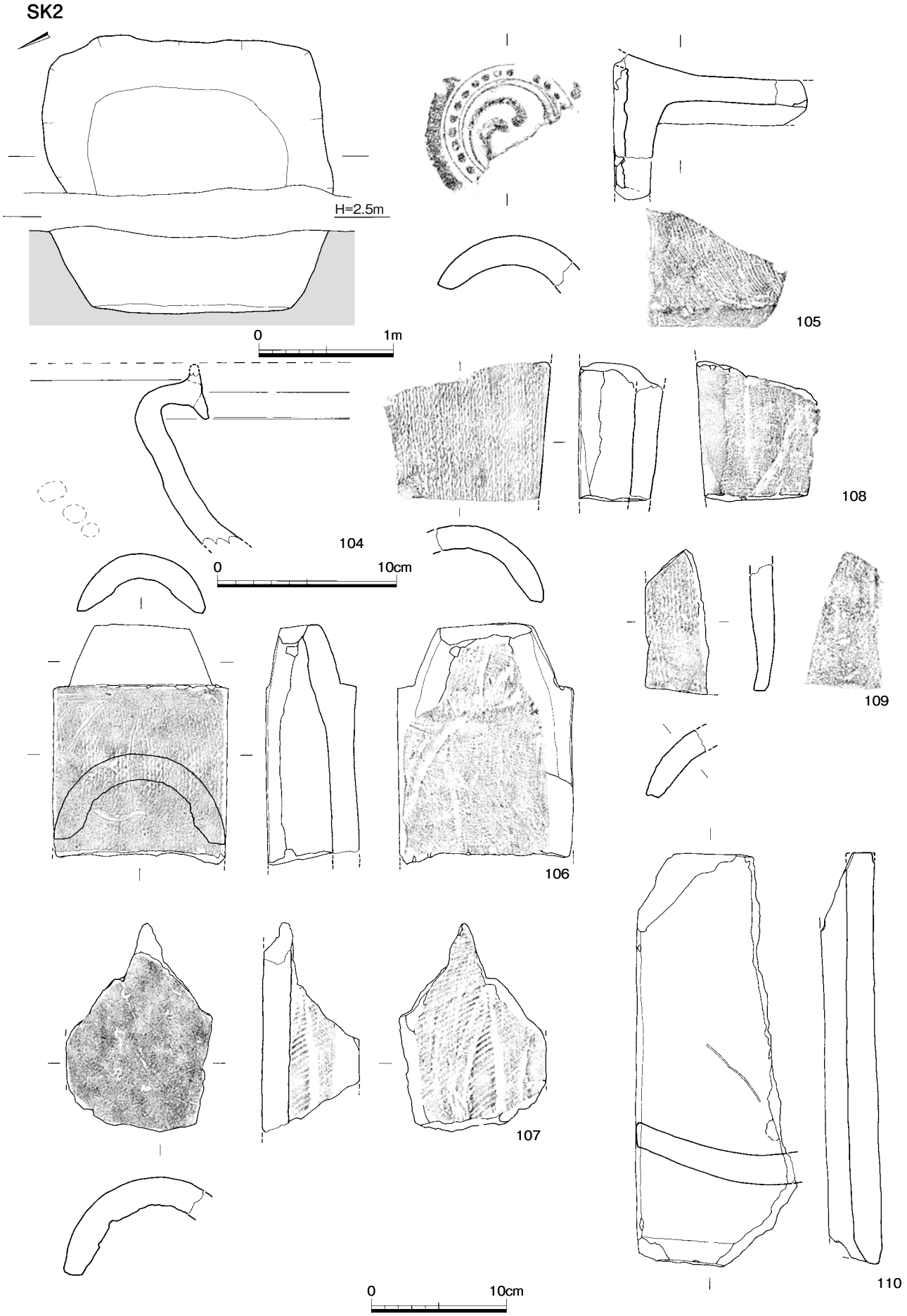
以下は露胎である。19は薄い玉縁状の口縁をもつ。20は白磁皿Ⅲ-1類で、外反する口縁部をもち、内面見込みの釉は輪状に掻き取られる。内面胴部中位に一条の沈線が巡る。外面胴部下半から底部は露胎である。21は同安窯系青磁碗Ⅰ類とみられる。胴部上位でやや内側に屈曲し、その屈曲部分内面に一条の沈線が巡る。内面にはヘラ状工具による花文とやや細かい櫛目文が、外面には粗い櫛目文が施される。22は青磁碗口縁部片で、器壁は薄く、口縁部は外反する。23は東播系須恵器片口で、胎土には１～２㎜大の長石・石英を多く含む。24は高台付瓦器椀で、二次的に被熱したのか全体に赤味を帯びる。外面は摩滅しており、調整不明だが、内面にはミガキが施される。25は瓦器皿か。外面はナデ、内面はミガキが施される。底部には指頭圧痕が残る。26～32は土師器坏である。底部が確認できない31以外は底部糸切りで、板状圧痕が残る。32には黒斑がみられる。33～35は土師器皿である。すべて底部糸切りで、板状圧痕が残る。36～40は掘り方下層から出土した。36・37・38は土師器皿で、底部は糸切りで、36・38には板状圧痕が残る。38は静止糸切りで、内面にヘラ状工具によるナデの痕跡が残る。39・40は瓦器椀で、底部に断面逆三角形の低い高台がつく。内面にはミガキが施される。出土遺物から12世紀後半頃の遺構と考えられる。



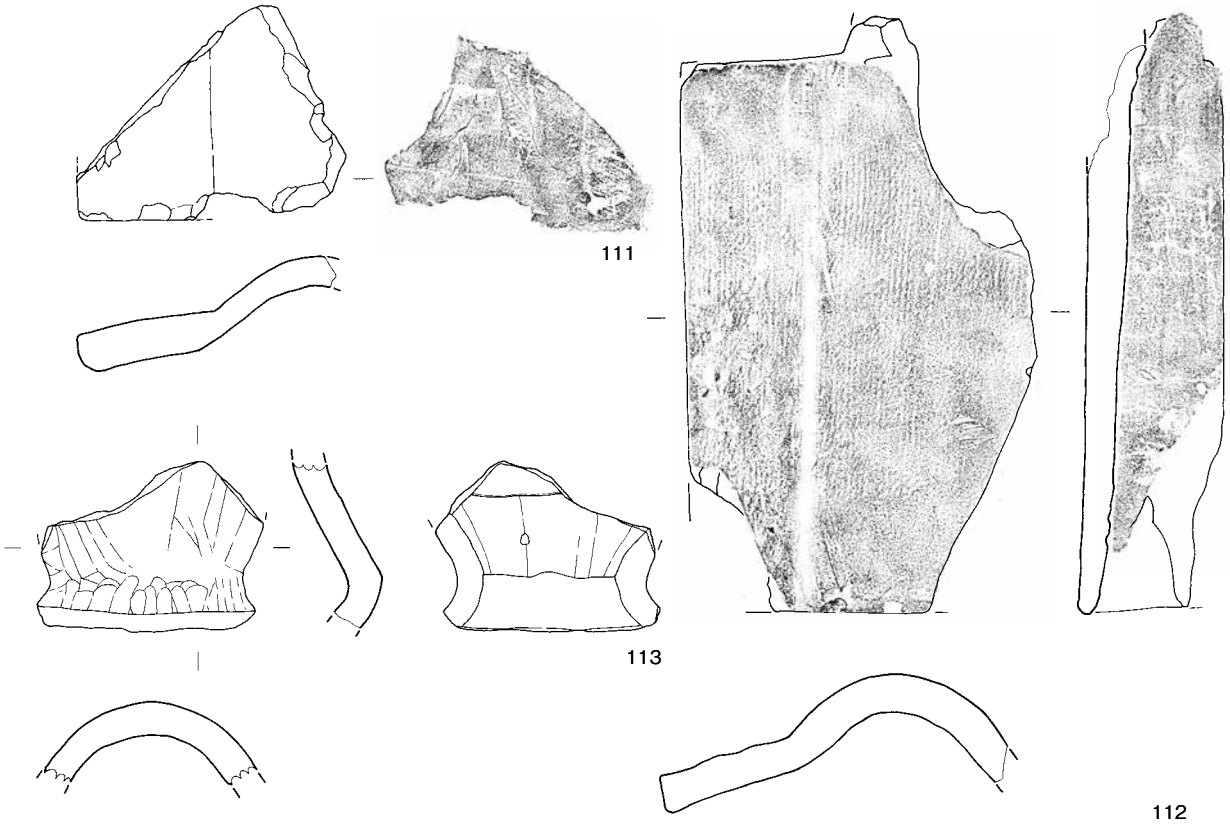
第９図　SK1実測図（1/40）および出土遺物（1/3、103は1/4）

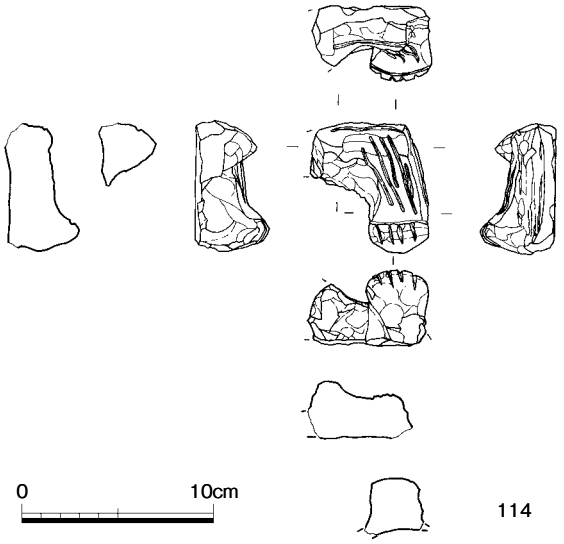
ＳＥ12（第８図）　調査区の南東側に位置する。平面楕円形だが、一部が後世の攪乱により壊されている。現状で長軸3.1m、短軸2.5m、遺構検出面からの深さ1.5m、標高0.9m付近のやや東寄りで木製の井筒を検出した。木桶とみられるが木質は劣化し脆弱な状態であった。井筒は円形で、径0.62mを測る。埋土は暗褐色～暗灰褐色砂質土である。ＳＫ13・ＳＰ14と重複し、いずれよりも新しい。

出土遺物（第８図）　41～48は井筒内から出土した。41は白磁皿か。口縁部はやや内湾しながら外に開く。外面にヘラ状工具による施文がみられる。42は白磁碗である。口縁部輪花で、外反し、端部は細い。内面胴部上位に一条の沈線が巡り、細いヘラ状工具により草花文が施される。43は白磁碗Ⅱ類か。口縁部はごくわずかに外反する。内面胴部中位に一条の沈線が巡り、見込みは釉が輪状に掻き取られる。外面下半以下は露胎である。44は東播系須恵器の鉢で、やや小型のものか。45は瓦器椀で内外面ともに横位、斜位のミガキが施される。46・47は土師器坏である。底部糸切りで、47には板状圧痕が残る。46の内面には工具によるナデがみられる。48は土師質の不明製品で、高坏や支脚の一部、あるいは注口部分にあたるものか。中央部分には孔がある。外面は浅黄橙色、内面は灰白色を呈し、焼成は良い。49～99は掘り方内から出土した。49～55は白磁碗である。49は白磁碗Ⅳ類



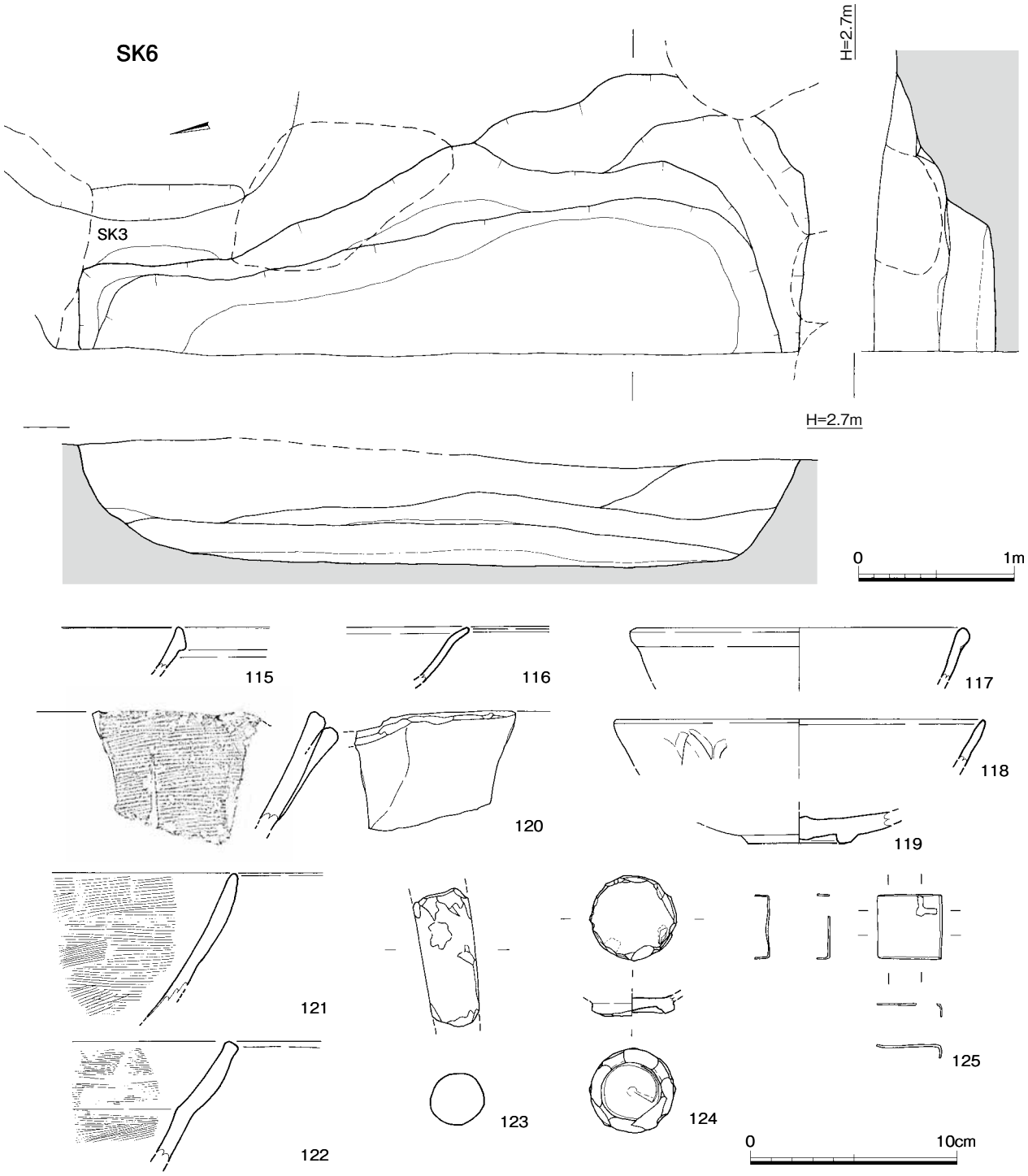
第10図　SK2実測図（1/40）および出土遺物①（104は1/3、1/4）





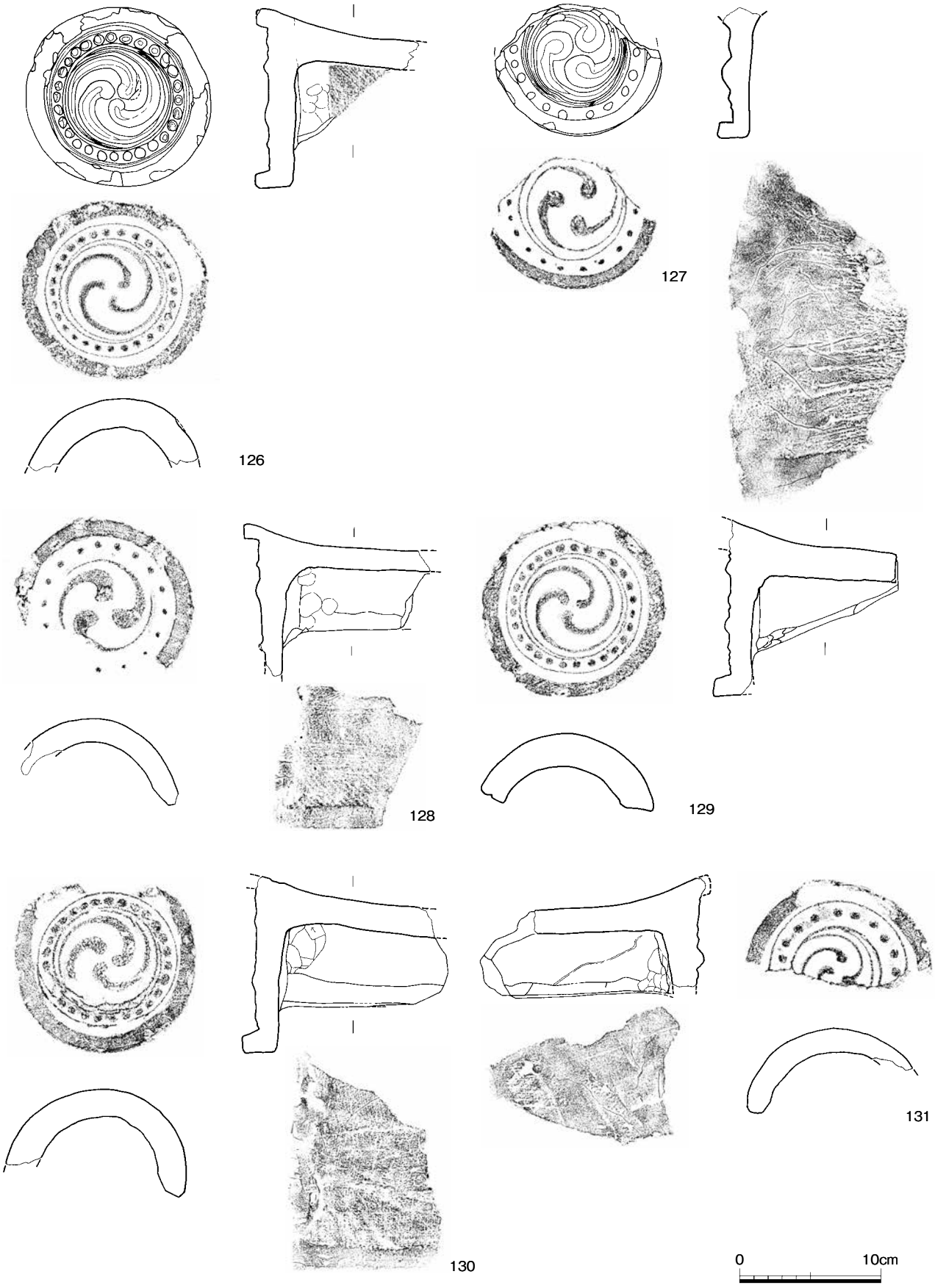
第11図　SK2出土遺物②（1/4）

で厚い玉縁状口縁をもつ。二次的に被熱し、赤味を帯び、器面も荒れている。50～54は白磁皿Ⅴ類で、口縁上端部を水平にし、外方に尖る。55は白磁碗Ⅱ類か。56は白磁皿Ⅳ類の底部片か。内面見込みに草花文が施され、底部は露胎である。57～61は青磁碗である。57・58は同安窯系青磁碗Ⅰ-1ｃ類で、内面には一条の沈線が巡り、櫛描文とヘラ状工具による草花文、外面には粗い櫛目文が施される。59～61は同安窯系青磁碗Ⅲ類で、口縁部を外反させ、59・60の外面には粗い櫛目文が施される。62・63は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-３類で、口縁端部は丸く、直口である。内面に片切彫りによる雲文状の文様と短い櫛目文が施される。64は青磁皿で、胴部中位で屈曲し、口縁部は直に立ち上がる。胴部中位以下は露胎である。65・67は中国産灰釉陶器の小壷である。68は鉢Ⅳ類で、口縁部は折り曲げて玉縁状に肥厚される。69・70は中国産無釉陶器捏鉢である。69の内面は使用により摩滅している。71は中国産陶器甕底部で、内面には溶けたガラスが付着している。ガラス溶解のための坩堝に転用されたものとみられる。72・73は瓦質土器鉢か。66は土師器小壷で、蛸壷か。74は土師器焙烙である。75～77は瓦器椀で、77には断面台形の短い高台がつく。75は内外面に縦位・斜位のミガキ、76は内面縦位、外面横位のミガキが施される。78・79は土師器高台付坏で、78はややハの字形に開く高台が、79は直線的なや

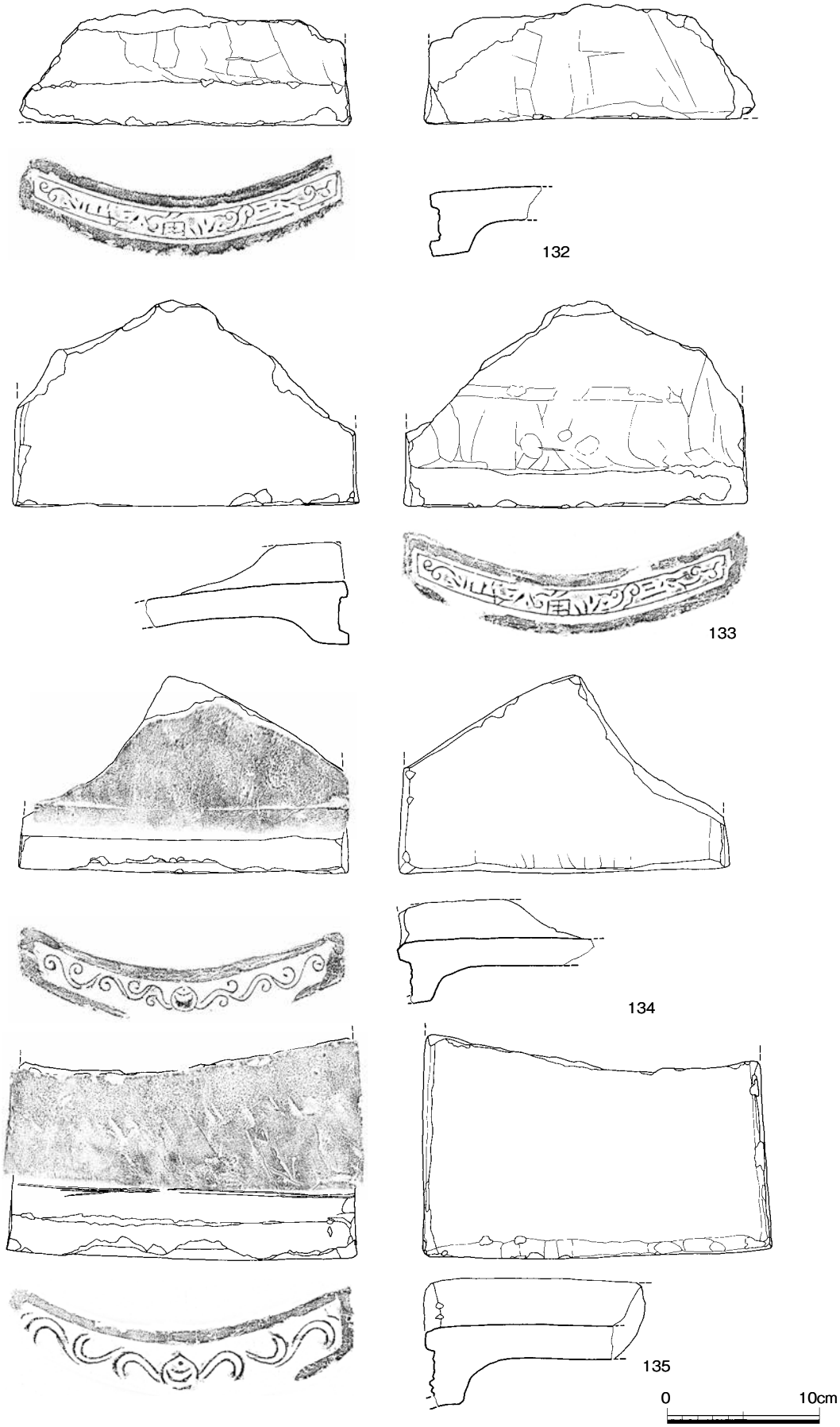


第12図　SK6実測図（1/40）および出土遺物①（1/3）

や高い高台が付く。80～85は土師器皿、86～90は土師器坏である。92は底部ヘラ切りか。板状圧痕が残る。92以外は底部糸切りで、87・88には板状圧痕が残る。90は胴部がわずかに内湾しながら口縁部に向かって外に開く。水挽き痕が明瞭である。94は滑石製石鍋底部で、煤が付着する。95は滑石製品で転用品か。用途は不明だが、台形に再加工している。96～99は古墳時代前期の土師器甕および壷である。混入したものとみられる。出土遺物には古墳時代前期、12世紀前半まで遡る遺物もあるが、遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半頃と考えられる。



第13図　SK6出土遺物②（1/4）



第14図　SK6出土遺物③（1/4）

３）土坑（ＳＫ）

ＳＫ１（第９図）　調査区の北側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、北東部付近を後世の攪乱により壊されている。現状で長軸は1.75m、短軸は1.5m、深さは0.35～0.55mを測る。主軸方位はN-15°-Eにとる。埋土は、暗灰色～暗褐色砂質土で、炭が多く混じっていた。

出土遺物（第９図）　100は白磁碗口縁部で、胴部からわずかに内傾しながら立ち上がる。101は白磁碗底部で削り出しの低い高台である。内面見込みと胴部の間に明瞭な段をもつ。102は龍泉窯系青磁束口碗か。外面に鎬蓮弁文を描く。103は軒丸瓦の瓦当片で、三巴文の一部と珠文がみえる。内区と外区の間に界線があり、外区珠文帯の外には圏線がある。このほかにも中国産褐釉陶器や龍泉窯系青磁碗片などが出土している。遺構は15～16世紀の所産と考えられる。

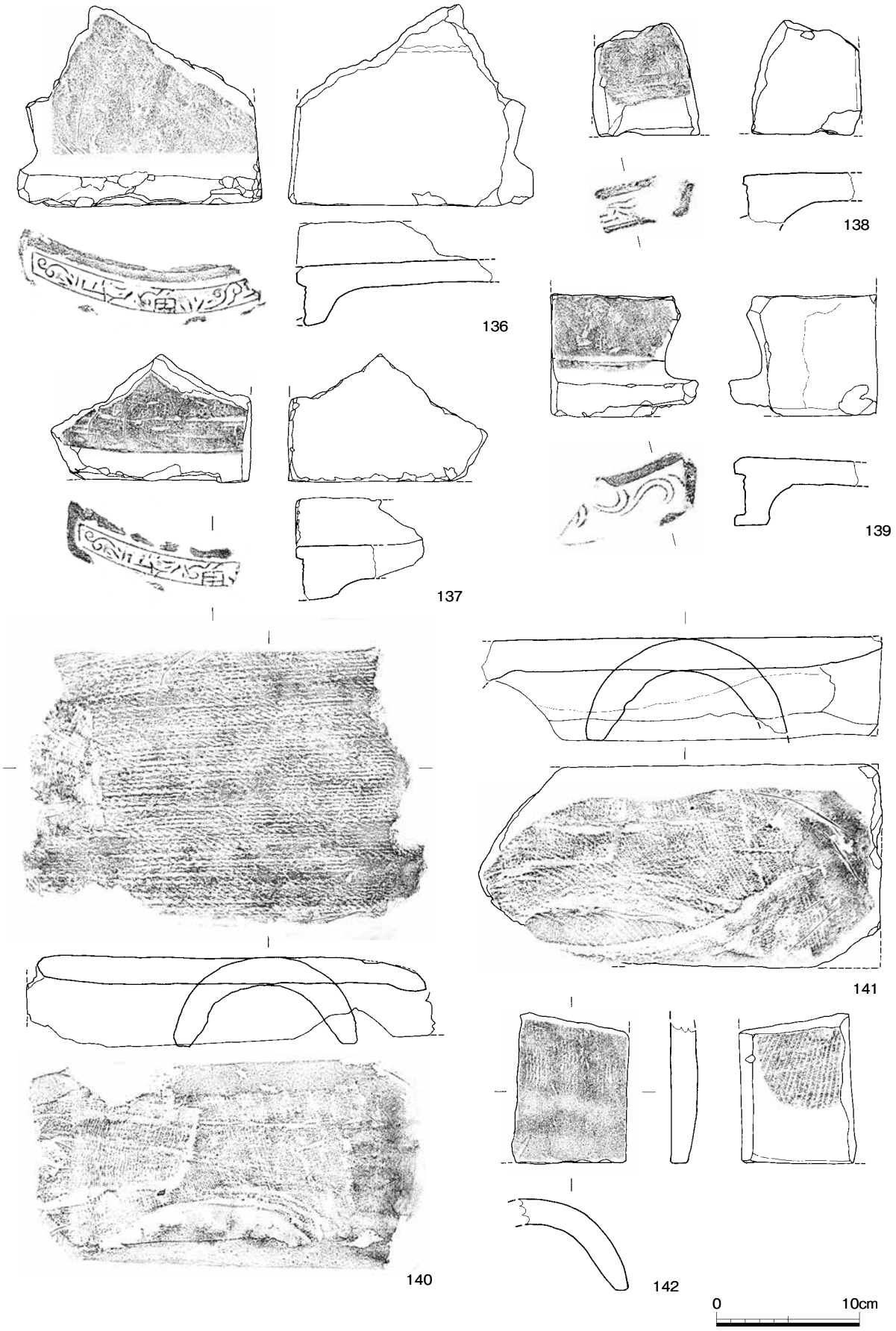
ＳＫ２（第10図）　調査区の北東側に位置し、西側は調査区外に延びており、正確な規模は不明である。現状で長軸2.15m、短軸1.05m、深さは0.55～0.6mを測り、主軸はN-25°-にとる。多くの瓦が廃棄されていた。埋土は暗褐色砂質土で、炭化物や焼土も多く含まれる。

出土遺物（第10図）　104は常滑焼大甕の口縁部で、灰オリーブ～灰白色を呈する自然釉が付着する。内面に指頭圧痕がのこる。105は軒丸瓦で、瓦当には左巻き三巴文と珠文が配される。巴文は全体に太めで、尾は細長く、内区と外区の間の界線に接している。珠文はやや太めで、16個以上ある。外区珠文帯の外に圏線を有する。周縁は高く突き出している。内面には布目痕が残る。106～109は丸瓦である。106・108・109の凸面には縄目タタキ痕、凹面には布目痕が残る。106・108の凹面には吊り紐の痕跡もみられる。107の凹面は丁寧なナデ調整、凹面にはコビキＡの痕跡が明瞭に残る。110は平瓦で、全体にナデ調整される。凹面に離れ砂がみられる。111・112は雁振瓦で、111がやや小型で、全体にやや粗くナデ調整される。平瓦部凹面に布目痕が部分的に残る。112の丸瓦部凸面には縄目タタキ痕、凹面には布目痕が残り、離れ砂が目立つ。平瓦部は両面とも縄目タタキ後、指オサエにより調整される。谷部と平瓦部の接合部には板状工具によるナデの痕跡が残る。113は留蓋瓦の一部か。壷状を呈し、内外面に工具によるナデが明瞭に残る。114は獅子の脚部片で、留蓋瓦の装飾の一部か。指オサエにより、丁寧に器壁を調整しており、線刻により毛や爪など細部を表現する。出土した瓦は15世紀後半～16世紀前半頃のものと考えられ、出土遺物から16世紀後半頃に瓦が廃棄されたものとみられる。

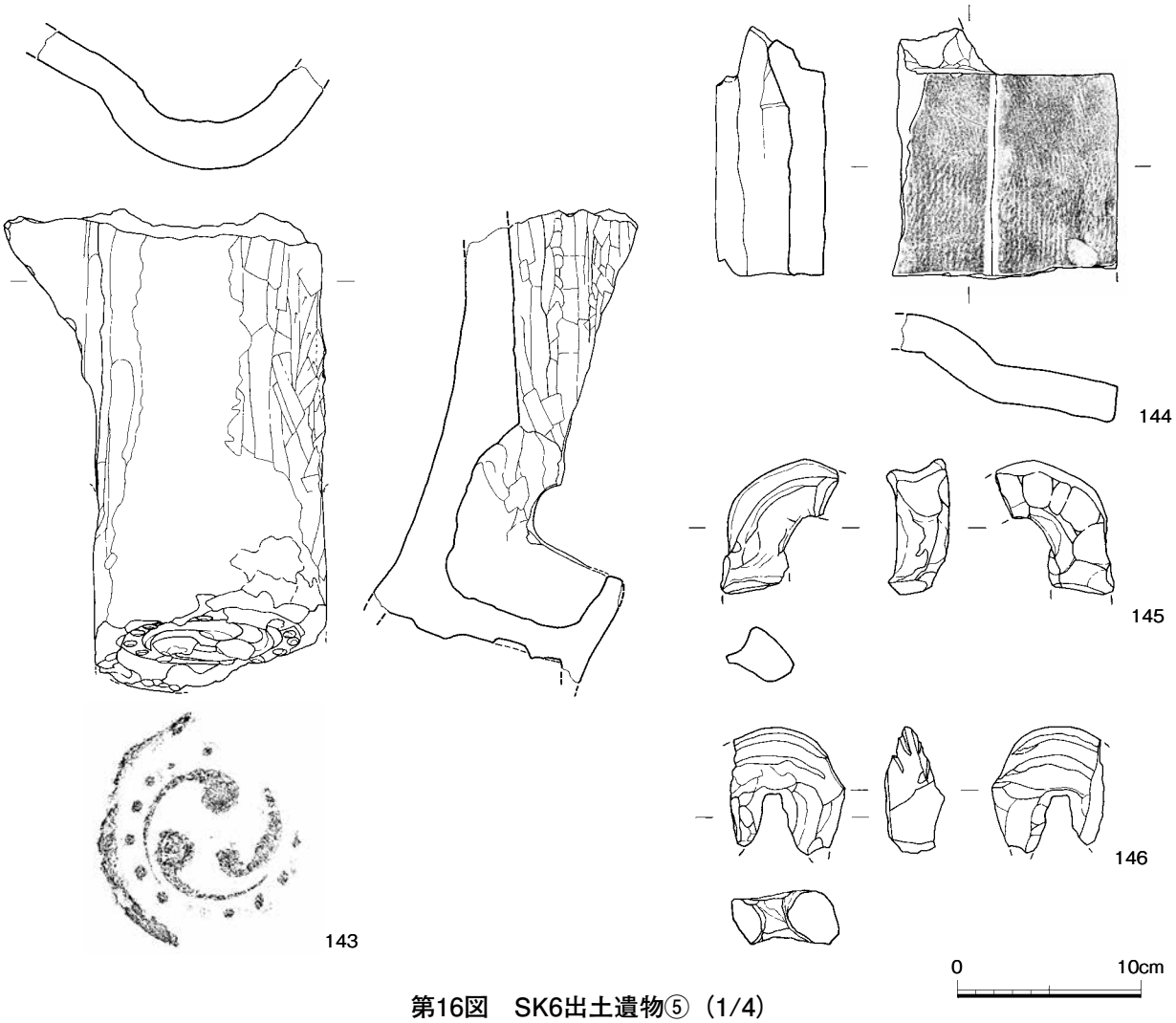
SK６（第12～17図）　調査区の中央西寄りに位置し、平面形はいびつな隅丸長方形を呈し、西側は調査区外に延びており、本来の形状は不明である。現状で、長軸4.7m程度、短軸0.6～1.4m程、深さ0.7～0.75mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。大量の瓦が廃棄されている状況であった。瓦とともにわずかに陶磁器類や土師器類も出土している。

出土遺物（第12～17図）　115は白磁碗Ⅳ類で、やや厚い玉縁状の口縁をもつ。116は白磁碗Ⅸ類で、口縁部をやや外反させ、口唇部の釉は掻き取られる。117は青磁碗口縁部で、口縁端部を肥厚させ、小さな玉縁状としている。118は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、外面には鎬蓮弁文が施される。119は白磁皿底部で、削り出しの低い高台である。内面見込みは全体に釉が掻き取られ、外面下半以下は露胎である。120はやや軟質の瓦質土器擂鉢である。内面に横方向のハケメと摺目がある。121・122は土師質の鍋で、内面には横方向のハケメがみられ、外面には煤が付着する。123は防長系足鍋の脚部片か。使用による被熱の痕跡はみられない。124はいわゆる瓦玉で、白磁皿の底部を円形に加工している。125は青銅製の金具で、外面には孔があるが用途は不明である。

126～131は軒丸瓦である。126・129・130はやや肉厚の左巻三巴文と珠文を配する。巴文の尾は長く、内区と外区の間の界線に接する。珠文は28個ある。外区珠文帯の外に圏線が巡る。凹面には布目



第15図　SK6出土遺物④（1/4）

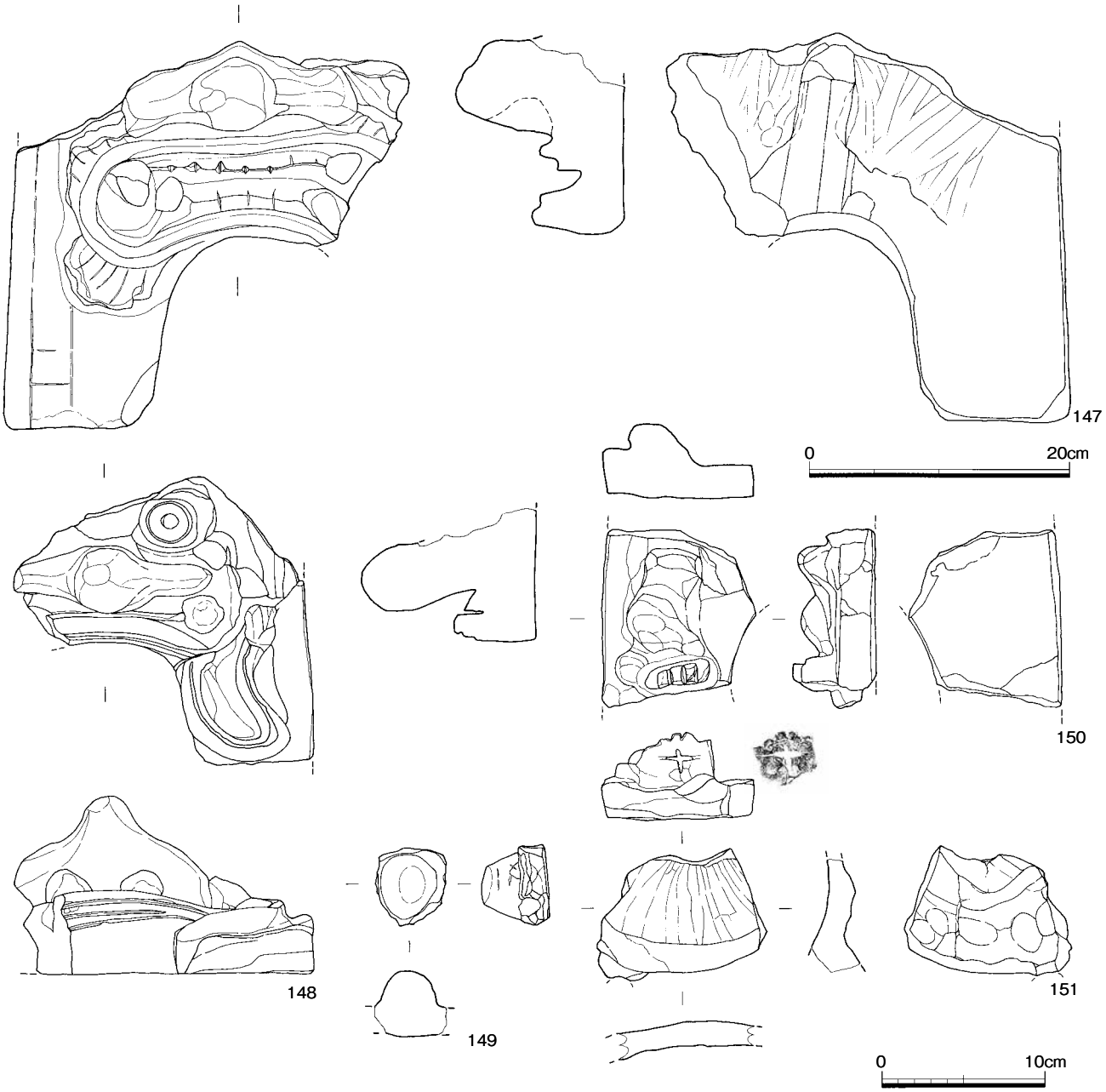


第16図　SK6出土遺物⑤（1/4）

痕が残り、130には吊り紐の痕跡が残る。126・130の凸面はナデ調整され、129の凸面には縄目タタキ痕が残る。127は瓦当部分のみの破片で、上１/３が欠失する。左巻三巴文と珠文を配し、巴文は肉厚で頭も太く盛り上がる。尾は長く、内区と外区の間の界線に接する。珠文は11個が確認できる。128は肉厚の左巻三巴文とやや太い珠文を配する。巴文の尾は長いが、それぞれが独立している。珠文は15個以上ある。凹面にはコビキＡの痕跡と布目痕が残る。凸面はナデ調整される。131は瓦当の下半を欠失する。やや太めの左巻三巴文と太い珠文を配する。巴文の尾は長く、内区と外区の間の界線に接し、外区珠文帯の外に圏線がある。凹面には布目痕と吊り紐の痕跡が残る。

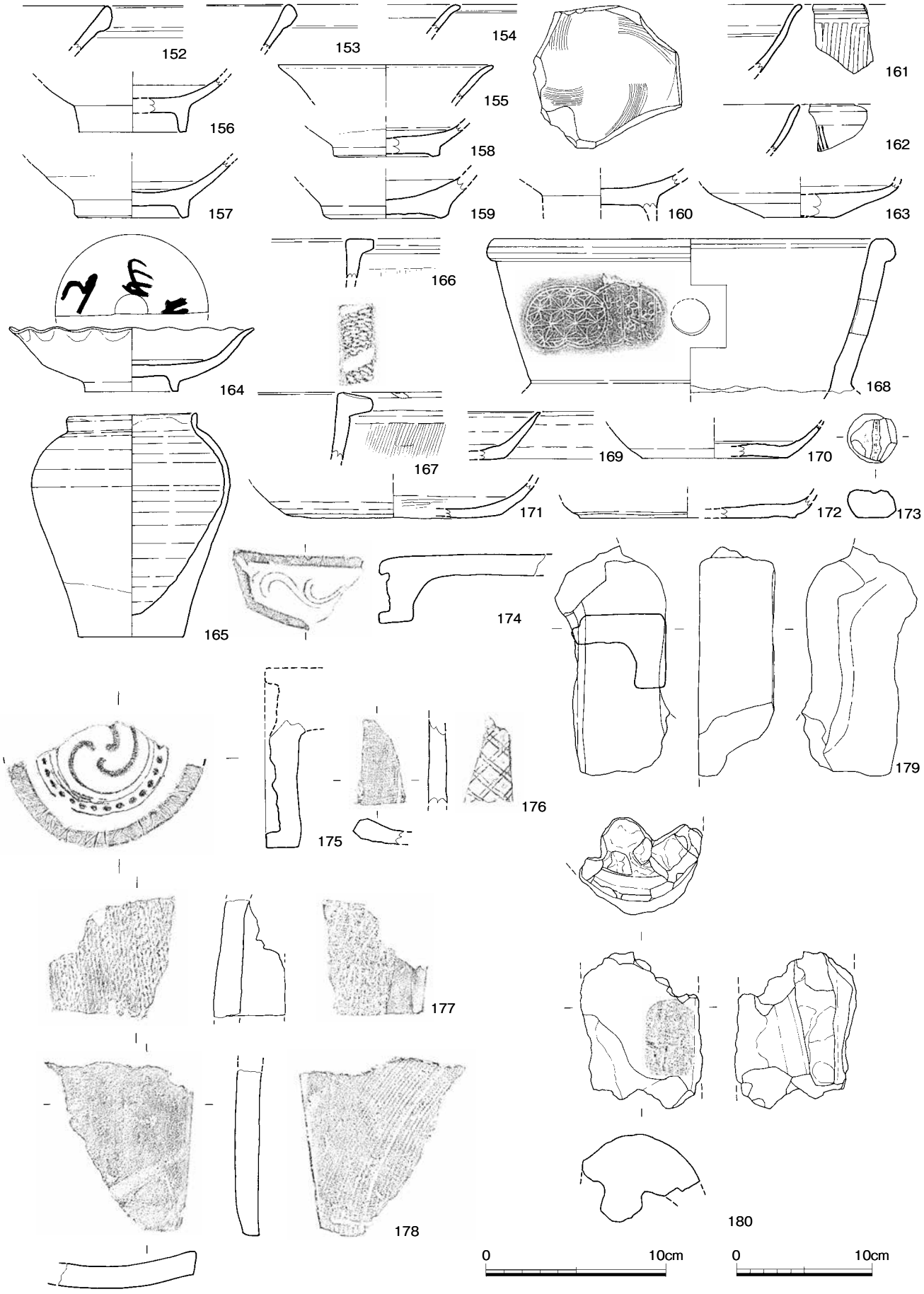
132～137は軒平瓦である。132・135・136・137・138は内区に蕨手状唐草文の主葉と５枚の葉が一セットとなりこれが４回反転しているものか。その間に「三用山」あるいは「三角山」銘が施される。外区は素文であるが、内区と外区の境に界線を有する。顎部裏面はタテケズリ後、粗いナデと指オサエ、平瓦部凹面には離れ砂を有し、工具によるナデが施され、部分的に布目痕が残るものもある。133の凹面には重ね焼き時の煤が直線的に残る。134・135は中心飾りに半肉彫りの宝珠を配し、周囲にやや簡略化された唐草文を配置する。134は上に２回、下に３回反転させた唐草文を配し、平瓦部凸面に凹型台の圧痕と布目痕が残る。凹面には離れ砂を有する。135は宝珠側から３回反転する。主葉は蕨手状で、各々に子葉が付き、二重にみえる。３回転目には上下に子葉が付く。

平瓦部凸面に凹型台の圧痕と布目痕が残り、凹面には離れ砂を有する。139はこの破片である。140～142は丸瓦である。140の凸面には縄目タタキ、凹面にはコビキＡの痕跡、布目痕が残る。141の凹



第17図　SK6出土遺物⑥（1/4、147は1/5）

にはコビキＡ痕と布目痕が残り、凸面がナデ調整される。142は凹面に布目痕、凸面に縄目タタキ痕が残る。端部はナデにより丁寧に調整される143は鳥衾瓦で、肉厚の三巴文と珠文を配している。巴文は左巻きで、尾は長いがそれぞれ接することなく独立している。珠文は12個以上ある。内外面に工具によるナデ調整の痕跡が明瞭に残る。丸瓦部凹面には布目痕、平瓦部凸面には縄目タタキ痕が残る。二次的に被熱したものか全体に赤変している。144は小型の雁振瓦で、外面は縄目タタキ後、軽くナデられる。145・146は飾り瓦の一部とみられる。145は手捏ねにより成形され脚などの一部かと推測される。146はひれやひげの一部か。ヘラ状の工具による沈線がある。147・148は鬼瓦である。鬼面の大部分が欠失しているが、147は大型のもの、148はやや小型のものであり、その容貌にも違いがある。大型の147の方が、ひげや歯等の表現が細かく、148の方がやや単純化されている。147の顔の横には沈線により縦線が長く引かれ、その中に短い横線を刻む。珠文帯の退化した表現か。裏面には縦位の半環状把手が付く。149は鬼瓦や飾り瓦の鬼や獅子等の目であろう。150は小型の鬼瓦で、



第18図　その他の出土遺物（1/3、174～180は1/4）

獅子や邪鬼の脚部か。足の裏に「十」のヘラ描きがある。151は留蓋瓦の一部であろうか。壷型を呈し、内面には指頭圧痕が残る。瓦は15世紀後半～16世紀前半頃のものと考えられ、その廃棄は16世紀後半頃に行われたとみられる。

４）その他の遺物

ここで、調査区内の遺構や攪乱内など、調査中に出土した遺物の中で抽出したものを紹介する。152～160は白磁である。152・153は白磁碗Ⅳ類の口縁部で、端部を肥厚させ玉縁状とする。154は白磁椀Ⅴ類の口縁部で、口縁部を屈曲させ外方に出す。155は白磁皿Ⅸ類で、口縁部がやや外反しながら外に開き、口縁端部は口禿である。156～159は白磁碗底部片である。156・157は直線的でやや高い高台、158・159は削り出しの低い高台をもつ。いずれも高台は露胎である。157の内面見込みは釉が輪状に掻き取られる。160は小片のため判断が付かないが、白磁碗Ⅴ類かⅥ類の底部である。一部高台外面まで施釉されているが、高台の大部分は露胎である。内面に短い櫛目文をもつ。161は同安窯系青磁碗Ⅲ類で、胴部外面に幅広の粗い櫛目文が施される。162は同安窯系青磁碗Ⅰ類か。内面は無文のようだが、外面に細かい櫛目文が施される。163は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類の底部で、底部の釉は焼成前に掻き取られている。164は肥前系白磁輪花皿で、内面は幅広く蛇の目釉剥ぎされ、その部分に墨書がみられる。165は陶器小壷で、外面口縁端部以下胴部下半まで施釉される。外面口縁部下位には縦方向のハケメがみられ、煤が付着する。168は瓦質土器香炉あるいは火鉢である。穿孔が２箇所あり、本来は４箇所あるものとみられる。169～172は土師器坏で、169・170・172は底部糸切りで、172には板状圧痕が残る。171は内面底部にミガキが施される。173は瓦玉で、上面には布目痕が残る。174は軒平瓦瓦当片で、ＳＫ６出土の135・139と同型のものである。175は軒丸瓦の瓦当で、上半は欠失しているが三巴文と珠文を配し、外区珠文帯の外に圏線が巡る。176は丸瓦片で、凸面には二重格子目タタキ、凹面には布目痕が残る。177は丸瓦片で、凸面には縄目タタキ、内面には布目痕が残る。178は平瓦で、凸面は丁寧なナデ調整、凹面にはコビキＡの痕跡が残る。179は鬼瓦の一部とみられる。180は土壁や炉壁の一部と考えられる。外面に布目痕が一部残り、内面には竹や木の枝の痕跡が残る。

Ⅳ．総括

ここまで、今回の調査で検出した遺構・遺物について述べてきたが、箱崎遺跡第105次調査の成果についてまとめたい。

調査地は、遺跡範囲の北東端に位置し、博多湾に面して、南北にのびる砂丘の北端部に近く、地形としては北側および東側にごく緩やかに傾斜している。調査範囲は全面的に近世から現代までの建物等の解体やごみ穴等により攪乱を受け、中世までさかのぼる遺構は少なく、また遺構もそれほど多くは検出されなかった。検出した遺構は、井戸３基、土坑５基、廃棄土坑３基、溝２条、小穴６基である。井戸は12世紀後半頃～13世紀頃、土坑は12～13世紀頃と15～16世紀頃のもの、溝は14世紀代のものと15～16世紀頃のものがある。出土遺物には古墳時代前期や８～９世紀代にまで遡るものも少量出土しているが、多くは12世紀～13世紀頃のものであり、集落が遺跡全体に展開する時期のものが多い。また、15世紀後半～16世紀前半頃の瓦が多量に廃棄された土坑が３基あり、軒平・軒丸瓦や丸瓦・平瓦・鬼瓦等が出土した。軒平瓦の瓦当には「三用山」あるいは「三角山」と読める山号銘があるものもあり、付近に当該期の寺院が存在したものと推測される。

今回の調査で確認できた遺構は少なく、また近世から現代までの攪乱により、壊されている部分も多いため不明確だが、調査地は砂丘の北端部に近く、生活域の縁辺部にあたるものとみられる。検出された溝や土坑などの主軸方位は真北から10°～25°東に振れ、概ね周辺の地割と方位を同じくすることが分かる。検出した溝２条は調査区を横切るかたちで、やや主軸方位を異にし、若干の時期差がある。遺構の在り方として、溝の両側に遺構が分布しているような状況が看て取れるため、それぞれの時期に区画溝として機能したものとみられる。

今回の調査で出土した瓦について、箱崎遺跡のこれまでの調査での状況も踏まえて若干の検討を加える。調査で出土した瓦は、15世紀後半～16世紀前半頃のものと考えられ、その廃棄年代は、16世紀後半頃と推測される。既往調査の瓦出土量はそれほど多くなく、１調査区から多くて数点の瓦当片が出土する程度である。瓦の分布は全時期を通じて筥崎宮の南側に集中している。Ⅰ期には筥崎宮南東部に集中しているが、北東の70次周辺にも分布がみられる。Ⅱ期になると南側の26次６区や84次、110次で中国系瓦が出土し、さらに84次からは薩摩塔も出土していることから、寺域の拡大が推測される。Ⅱ期の中国系瓦は、当該期の他形式の分布とほぼ重なるが、北西の５次や南西の27次Ａ区でも出土している。Ⅲ期では遺跡縁辺部である55次、61次、67次でも瓦の出土がみられ、遺跡内での遺構が時期を追って周縁に展開していく様相と重なっている。本調査区は遺跡の北東側縁辺部に位置し、寺院等が展開した時期は明確ではない。本調査区では、まとまった量の瓦が廃棄された状況で出土しており、中世後期の段階には少なくとも寺院が近辺に存在していた可能性が高く、筥崎宮周辺寺院の展開との関連が推測される。

参考・引用文献

久住猛雄編　2019　『箱崎 58』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1373 集）

佐藤一郎　2013　佐藤一郎 2013「第６章 箱崎遺跡 -『古代末から中世にかけて」福岡市史編纂委員会編『新修 福岡市史 - 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』pp.242-247

重松敏彦　2018　「古代の箱崎と大宰府」九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版 pp.24-35

下山正一　1998　「福岡平野の縄文海進と第四紀層」小林茂ほか編『福岡平野の古環境と遺跡立地 - 環境としての遺跡との共存のために -』九州大学出版会 pp.11-44

中尾裕太　2018 a　「考古学からみた箱崎と博多湾」『九州史学』180 pp. 3 -32

中尾裕太　2018 b　「考古学からみた箱崎」九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版 pp.10-23

１　調査地全景　南西から

２　Ⅰ区全景　南西から

３　Ⅱ区全景　南西から

４　Ⅱ区全景　北から

５　Ⅲ区全景　南西から

６　Ⅲ区全景　北から

写真図版２

７　Ⅰ区西壁土層　南東から

８　Ⅱ区東壁土層　北西から

９　Ⅱ区東壁土層　南西から

10　Ⅲ区東壁土層　北西から

11　SD7（Ⅰ区側）西から

12　SD7（Ⅱ区側）南東から

13　SD16　西から

14　SE8（Ⅱ区側）北西から

15　SE12　南東から

16　SK1　北西から

126

128

133

130

134

135

写真図版 4

106

140

141

143

144

112

147

148

報　告　書　抄　録

ふりがな	はこざき 67　― はこざきいせき だい 105 じちょうさほうこく―
書名	箱崎 67
副書名	― 箱崎遺跡 第 105 次調査報告 ―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1484 集
編著者名	吉田大輔
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号　TEL 092-711-4667
発行年月日	2023 年 3 月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
箱崎遺跡（はこざきいせき）	福岡県福岡市東区箱崎３丁目2416番1（ふくおかけんふくおかしひがしくはこざきちょうめばん）	40131	2639	33° 37′ 11″	130° 25′ 33″	2019.11.25 ～ 2019.12.24	135㎡	共同住宅建設 （記録保存）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡	集落	鎌倉時代 室町時代 戦国時代 江戸時代	溝、井戸、廃棄土坑、土坑、柱穴、小穴	輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、土師器、須恵器、鋳造関連遺物 、土製品、石製品、金属製品	

要　約

箱崎遺跡第105次調査地は、遺跡範囲の北東端に位置する。調査地の現況の標高は約3.4ｍである。遺構は、地山である砂丘面（黄白色砂）上で検出した。遺構検出面の標高は約2.8ｍで、現地表面からの深さは約0.65ｍを測る。博多湾に面して、南北にのびる砂丘の北端部に近く、地形としては北側および東側にごく緩やかに傾斜している。

調査範囲は全面的に近世から現代までの建物等の解体やごみ穴等により攪乱を受け、中世までさかのぼる遺構は少ない。検出した遺構は、井戸３基、土坑５基、廃棄土坑３基、溝２条、小穴６基である。井戸は12世紀後半～13世紀頃、土坑は12～13世紀頃・15～16世紀のもの、溝は14世紀代・16世紀頃のものがある。主な出土遺物は、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系白磁碗・青磁碗、中国陶器壺・捏鉢等の輸入陶磁器類、土師器坏・皿、土鍋、瓦器椀、東播系須恵器の捏鉢、滑石製品等である。遺物は多くが井戸から出土し、小片が多い。また、15世紀後半～16世紀前半頃の瓦が多量に廃棄された土坑が３基あり、軒平・軒丸瓦や丸瓦・平瓦・鬼瓦等が出土した。軒平瓦の瓦当には「三用山」あるいは「三角山」と読める山号銘があるものもあり、付近に寺院が存在したものと推測される。

今回の調査で確認できた遺構が少なく、また近世から現代までの攪乱により、壊されている部分も多いため不明確だが、調査地は砂丘の北端部に近く、生活域の縁辺部にあたるものとみられる。検出された溝や土坑などの主軸方位は真北から10°～25°東に振れ、周辺の地割と方位を同じくする。また中世後半期の寺院が近辺に存在していた可能性が高く、筥崎宮周辺寺院の展開との関連も検討すべき課題である。

箱　崎　67

― 箱崎遺跡 第 105 次調査報 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1484 集

令和５年３月 23 日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　有限会社 成光社

福岡市南区大楠１丁目 29 番 33 号